

近代文学における東京の都市性

野中, 蘭 / NONAKA, Ran

(発行年 / Year)

2009-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2009-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

P377.5
M35-2
2008-32

2008年度修士論文

近代文学における東京の都市性

主査 高村雅彦教授

副査 陣内秀信教授

副査 渡辺真理教授

法政大学大学院工学研究科

建設工学専攻

07R5329 野中 蘭

Overview

Introduction

Purpose

Tokyo is the center of Japan's current presence in the city in the world.

Lost the war, Tokyo was the rag is only changed in decades. With a hopeful high economic growth, while scrap and build again, now out with the old things dirty.

And now Marunouchi Roppongi Shinagawa Shinjuku ... and how fitting that is growing rather than a skyscraper is built, the modern city.

However, there is much to Tokyo's history.

The glimpses of color could go a little Shinjuku Showa, Taisho MARUNOUCHI left the building, near the Kanda River and the Sumida River as well as a variety of architecture, atmosphere and air quality remain.

Can be called the foundation of the Meiji era, Tokyo, Tokyo, people will look at how the eye.

The literature that exists in the organization of the pan at the end of the Meiji era, Tokyo, and it is now in the literary world, many who had joined the young artist yet to leave the name of art.

Civilized place, pleased with the growth to evolve away from Edo to Tokyo, pride, was a sad scene in Edo and to disappear. Young people, BUCHIMAKE somewhere in the heart of the conflict, many were full of curiosity to know the idea. It Tanbi and Paris, along with the enjoyment of keywords.

Edo-Tokyo and deep space and hot-hearted young people seen yet what it was. And they wonder what I was dreaming of the future Tokyo.

In this study, to clarify what has been drawn to how it works. And explore whether and how to get connected to the city or building.

Research Methods

The work of writers and literary organizations participating in the pan, the situation in the literary world at the time, Tokyo was the living environment of the writer and do what was in there for them? I was reading.

And not only the literary work, to prove from the history of literature and the hypothesis that they might have had an impact on construction industry.

序論

目的

東京、現在の日本の中心であり、世界の中でも存在感のある都市である。

戦争に負け、ぼろぼろだった東京はたった数十年で大きく変わった。

希望にあふれた高度経済成長を迎え、一方でスクラップアンドビルドを繰り返し、汚れたもの・古いものを排除するようになった。

そして、今では新宿・丸の内・六本木・品川…と、超高層ビルが建っているというより生えているというのがふさわしいかのような、現代的な都市となった。

しかし、そんな東京にもまだまだ根が残っている。

新宿も少し離れれば昭和の色が見え隠れし、丸の内には大正の建築が残り、神田川や隅田川のそばには様々な建築だけでなく、その雰囲気や気質が残る。

今の東京の基盤とも言える明治時代、東京は人々の目にどのように映っていたのだろうか。

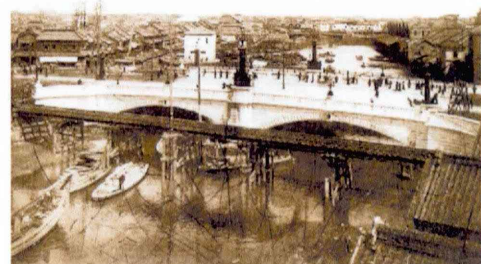
明治時代末に東京に存在した文芸団体パンの会、それには今の文学界にも、美術界にも名を残すまだ若き日の芸術家たちが多く参加していた。

文明開化が起こり、どんどん江戸から東京に変化していくことに発展していく喜びと、誇り、そして消えていく江戸の風景を悲しんでいた。若者たちには、その心の葛藤をどこかにぶちまけ、様々な考えを知る好奇心にあふれていた。それを、パリや耽美、享楽という様々なキーワードと共に。

まだ心の熱い青年たちが見た江戸とも東京ともとれない空間はどのようなものであったのだろうか。そして、彼らは未来の東京にどんな夢を見ていたのだろうか。

それを作品でどのように描いてきたのかを本研究で明らかにする。

そして、それが都市や建築にどのようにつながってくるのかを探る。



左絵 0-1 日本橋雪中 (HP『浮世絵のアダチ研究所』)

右写真 0-2 明治末の日本橋 (HP『日本一の橋日本橋開通』)

方法

文芸団体パンの会に参加していた作家たちの作品、当時の文学界の状況、そして作家たちの生きた環境から当時の東京はどのようなものであったのか、彼らにとってどのような存在であったのかを読み解く。

そして、その活動が文学界だけでなく、建築界に影響を与えていたのではないかという仮説を文献や彼らの経歴から立証していく。



絵 0-3 明治初期の銀座煉瓦街 (HP『(49) 外に開かれる目、内に高まる苦悩』)

目次

英文概要

序論

目的

方法

1章

1節 パンの会 1

2節 場所 4

3節 メンバー

(1) 木下杢太郎 10

(2) 吉井勇 12

(3) 長田秀雄 14

(4) 長田幹彦 16

(5) 谷崎潤一郎 17

(6) 石井柏亭 19

(7) 山本鼎 22

(8) 倉田白羊 25

(9) 森田恒友 26

(10) FRITZ RUMPF 27

(11) その他 29

4節 『屋上庭園』 30

5節 岩村透『巴里の美術学生』

(1) 岩村透 33

(2) 『巴里の美術学生』 35

(3) パンの会に与えた影響 36

2章 作家たちの作品全体から読む傾向

1節 香り 37

2節 酒 39

3節 カフェー・珈琲 42

4節 川 43

5節 東京 44

3章 各作品の分析

- 1節 『道程』 高村光太郎
 - (1) 高村光太郎とは 48
 - (2) 『道程』 50
- 2節 『東京景物詩』 北原白秋
 - (1) 北原白秋とは 55
 - (2) 『東京景物詩』 57

4章 時代ごとの比較 永井荷風『すみだ川』『つゆのあとさき』

- 1節 永井荷風とは 62
- 2節 『すみだ川』 64
- 3節 『つゆのあとさき』 68
- 4節 二作品の比較 72

5章 分離派建築会とパンの会

- 1節 分離派建築会 76
- 2節 主なメンバー
 - (1) 石本喜久治 74
 - (2) 堀口捨己 77
 - (3) 山田守 78
 - (4) 森田慶一 79
 - (5) 瀧澤真弓 80
 - (6) 矢田茂 81
 - (7) 倉田周忠 81
 - (8) 山口文象 82
- 3節 パンの会からの影響やつながり、共通点
 - (1) 耽美的 85
 - (2) 北原白秋と堀口捨己 86
 - (3) 太平洋画会 87
 - (4) 白樺派 87
 - (5) 石井柏亭 89

結論 91

参考文献・引用文献・HP 92

1章 パンの会

1節 パンの会

「江戸から生まれた東京を新しい巴里に変える会」

(『パンの会』野田宇太郎)

という考えのもと、パンの会は明治 41 (1908) 年末から明治 45 (1912) 年にわたって展開された。

パンの会が性格を持ち始めたのは、活動を始める前の明治 40 (1907) 年夏の『明星』新詩社の九州旅行である。新詩社の代表である与謝野鉄幹に引率され、太田正雄 (のちの木下杢太郎)、北原隆吉 (のちの北原白秋)、吉井勇、平野萬里が天草や長崎に残る南蛮文化に触れた。その中でも彼らが興味を持ったのは南蛮文学であった。そこから彼らは異国情調に向かって動き始めることになる。

『明星』は与謝野鉄幹の才を示す新時代の詩歌文芸を中心とした芸術雑誌だった。明治 33 (1900) 年、新詩社の機関紙として創刊され、明治 34 (1901) 年の鉄幹と晶子の結婚により、『明星』は黄金時代を迎える。ここまでの成功をおさめた要因には森鷗外や上田敏など啓蒙的な作家たちが顧問として存在していたことも忘れてはならない。

明治 39 (1906) 年頃には新しい時代の秀才たちが顔を連ねるようになる。北原白秋、長田秀雄、吉井勇、太田正雄、小山内薫、長田幹彦、平塚雷鳥、石井柏亭、高村光太郎、石川啄木ら『明星』には名を連ねていた。

その後、ヨーロッパ文学思潮として自然主義が日本に入ってきている中、与謝野鉄幹は反自然主義を『明星』の中で貫こうとする。そこに、ヨーロッパの文学に深い共感を持っていた若き新詩社のメンバーとの間にギャップが生じてしまう。

その溝は埋まることなく、明治 41 (1908) 年 11 月号を最後に『明星』は廃刊する。廃刊の理由は『明星』の中堅として活躍していた、北原白秋、太田正雄、長田秀雄、吉井勇、長田幹彦、秋庭俊彦、深川天川の脱退である。彼らには新しい時代の新しい精神に触れる必要を感じていたのだ。

ただ、誤解しないでおきたいのは、彼らが鉄幹と悪い決別をしていないということだ。彼らにとって『明星』は表現の場として絶対に必要なものであったし、『明星』がなければ九州旅行も存在しなかった。それがなければ、異国に対する思いも薄かったのかも知れない。そこでの交友関係がなければきっとパンの会もなかっただろう。彼らは明星派でいたことに誇りをもっていたはずである。木下杢太郎は後に

「先生 (与謝野鉄幹) は、明治から大正にかけて、日本の文壇に花らしい風雲を

捲き起こした闘將としての印象がいつそう強い

(中略)

吹き送る好風を帆に受けて、その船足に勢を附けたこと、何人も既に悉るが如くである」

(『パンの会』木下杢太郎 P81)

と語っている。

そこから、パンの会の始まりは、芸術雑誌『方寸』の会合からである。石井柏亭、山本鼎、森田恒友、倉田白羊、小杉未醒、阪本繁二郎、織田一麿、丸山晚霞、平福百穂、木下杢太郎、北原白秋、高村光太郎、長田秀雄、長田幹彦などの造形芸術家と作家たちとの関係である。

木下杢太郎は大学に入るまで畫家になるつもりであったという程、造形芸術に関心を持っていた。そこから、石井柏亭と意気投合することになる。また、当時流行した岩村透『巴里の美術学生』を読んでいたと思われる若き詩人たちは芸術にとても興味をもっていたに違いない。他にも、森鷗外や上田敏らの西洋文学の紹介もあり、文学と造形を結びつける、パリとお互いに対する関心は、両者を結びつける上で十分なほどであったはずである。

明治 41 (1908) 年、『明星』が廃刊となり、年の暮れも近づいたある日、『方寸』の会合で木下杢太郎、北原白秋、石井柏亭、山本鼎、倉田白羊、森田恒友らが集まった。そこで青年詩人と新鋭畫家との間に、新しい芸術運動を起こす会合を作るという話が持ち上がる。東京を巴里となす夢、それがパンの会の始まりである(「パンの会」はもともと、ベルリンで起こった芸術運動で『パン』という機関紙も発行されていた。この会のことは当時の日本にも紹介されていた。その会の名前を取って東京の「パンの会」が誕生した。パンとはギリシャ神話の牧羊神のこと)。

『江戸』はただ根強く東京の下町などに鑿鑿として棚曳く消えがての靄のやうに、切なく物悲しく、多感な詩人達の感情をそそつてゐた。西洋の『近代』の中に身を置かんとしてゐた彼等にとって、『江戸』はすでに異國であつた。つまり、西洋も江戸も、彼等には新しい異國と古い異國の相違があるにすぎなかつた。

(中略)

そこに生じた感情が異國情調 (エキゾチズム) であつた。」

(『パンの会』木下杢太郎 P97)

西洋文化と江戸の名残が混在した当時の東京は、前者が後者の存在を打ち消そうとしたりつつあつた。ヨーロッパの文学に惹かれる彼らは、江戸情調にも感傷をそそられていた。そのふたつが封建的な当時の日本に対する革命となる。それが彼らのよくいう、Sturm

und Drang、疾風怒濤の時代となったのである。

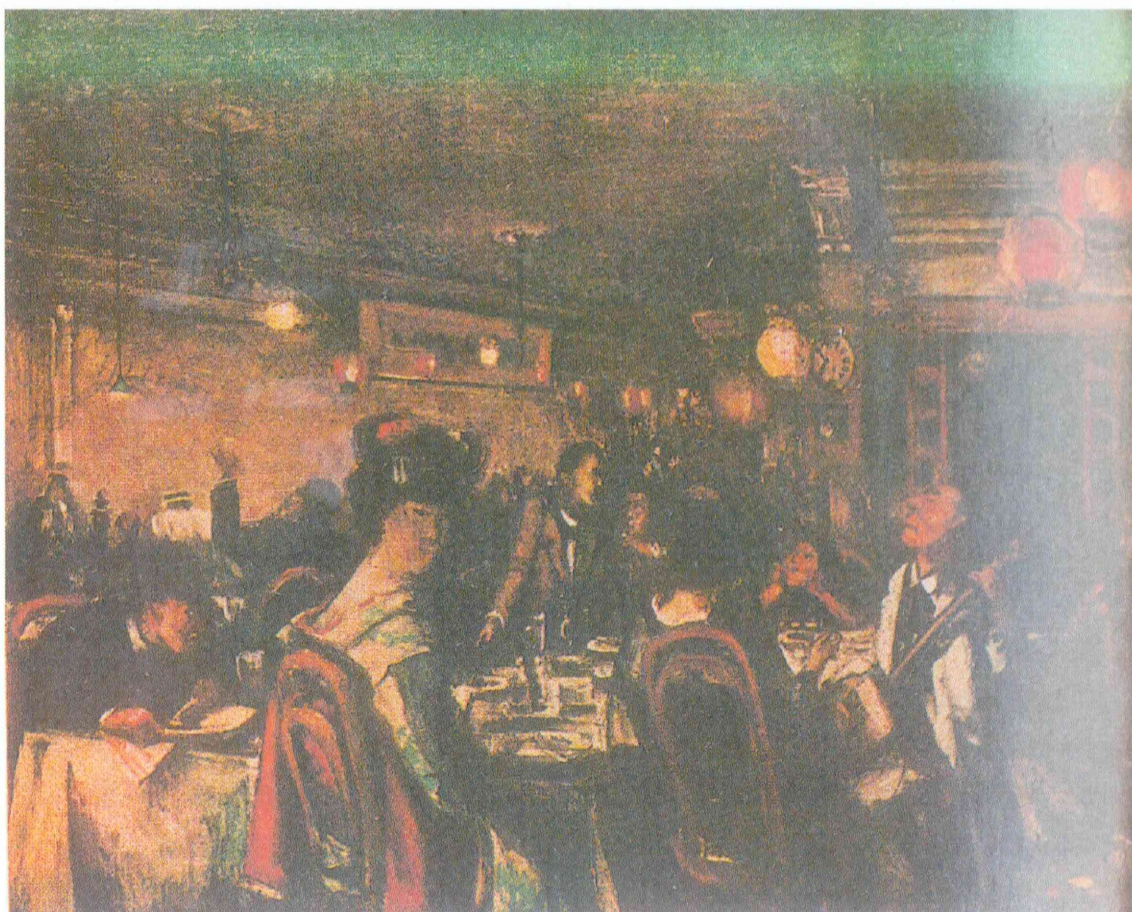
同じ明治 41 (1908) 年頃、ヨーロッパのサロンのような会合はあちこちで催されていた。森鷗外を中心とする観潮会、与謝野夫婦の新誌社、柳田國男の家に集まった龍土会などが有名であったが、それらの会合が勉強機関、社交機関であったのに対し、パンの会は「内に情熱の爆発力を含んだ」運動 (『パンの会』木下杢太郎 P100) であり、性格の異なるものであったことは重要である。そのため、龍土会の関係者などもパンの会に参加しており、次第に会合は大きくなり、詩人たちの間でも有名になり、文壇の名物となっていったのである。

2節 場所

パンの会の場所を探し始めたのは、運動の話を最初に持ち出した木下杢太郎である。「西洋風の倶楽部とか或は仏蘭西のカフェエのようなものを真似たくとも出来ない」(『パンの会』木下杢太郎 P98) と考えながら探していたが、なかなか困難なことであった。

隅田川をパリのセーヌ川みたくて、川沿いに西洋風と江戸風の情調を求め、カフェーを探したが、当時の東京にカフェーはまだ少なかったため、仕方なく、コーヒーを出す店として代わりに西洋料屋と決めて探し出した。

そこで見つけたのが両国橋近くの西洋館まがいの三階建ての「第一やまと」だった。そこは汚いがコーヒーも酒も出す店で、パンの会の記念すべき第一回はこの「第一やまと」の三階で開かれた。



絵 1-2-1 三州屋でのパンの会の様子 (『明治時代館』P431)

中央で演説しているのは谷崎潤一郎



絵 1-2-2 第一国立銀行 (HP『第一国立銀行の誕生』)

「両国の橋の下へかかりや
大船は柱を倒すよ、
やあれそれ船頭が懸声をするよ。
五月五日のしつとりと
肌に冷たき河の風、
世ツ目から来る早船の暖かな櫓拍子や、
牡丹を染めた絆纏が波にもまるる。

灘の美酒、菊正宗、
薄玻璃の杯へなつかしい香を盛つて
西洋料理の二階から
ぼんやりとした入日空、
夢の国技館の圓屋根こえて
遠く飛ぶ鳥の、夕鳥の影を見れば
なぜか心のみだるる。」

(『明治反自然派文学集1』木下杢太郎 P425)

という第一やまとに関する詩が残っている。「菊正宗」を「薄玻璃の杯」(西洋のグラス)について、その香りを懐かしむという、パンの会らしい西洋と東洋の入り混じった詩である。

しかし、あまりに汚く、かつ情趣のない店であったため、その後探し当てたのが小伝馬町の「三州屋」(絵 1-2-1) という、これも西洋料理屋だった。その下町一体は古い問屋が軒を連ね、まだ第一国立銀行(絵 1-2-2)時代の面影を残している西洋館で、江戸っ子の女主人が時には一流芸者を呼び、会は盛り上がったという。

その後、深川永代橋の脇にある「永代亭」(絵 1-2-3) やその川向こうの江戸趣味な鳥料理屋「都川」、浅草雷門「よか楼」、日比谷「松本楼」、神田「都」、神田錦町の西洋料理屋「ミカド」など、様々な場所で会は催されるようになる。

中でも「永代亭」はメイン会場であつたらしく、



絵 1-2-3 永代亭でのパンの会の様子 (HP『食後の唄』)

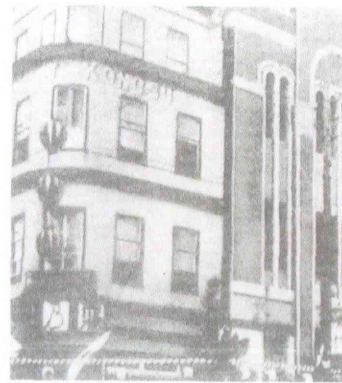
「深川の西洋料理の二階から
お花さんがまた大川を眺めてるよ。
入日の影は悲しかろ、
細い汽笛も鳴いている。
お前ひとり悲しんだとて、嘆けばとて、
つぶれた家は立ちません、
あんまり何して粗相はしまいこと。」

(『パンの会』木下杢太郎 P128)

という詩もの残っている。これは店の「お花さん」という女が何かにつまづいて皿を落としてしまい、主人に叱られたことを悲しんでいる様子を見て書いたものである。また「都川」は「永代亭」の二次会に使われていた。

明治 43 (1910) 年 11 月の「三州屋」の大会を境にパンの会は下火になる。それは渡欧などによる仲間の離散などが原因になっていると言われている。

その頃、日本橋小網町に「メゾン・鴻ノ巣」(絵 1-2-4・写真 1-2-5) や銀座(現在の銀座 8 丁目)の「カフェエ・プランタン」など、パリ式のカフェーに近いものが現れ始める。それらでパンの会は開かれなかったものの、メンバーにはとても愛されていた。



絵 1-2-4・写真 1-2-5 メイゾン・鴻ノ巣 (左 HP『古本倶楽部』奥田駒藏 右『明治時代館』P431)

「メイゾン・鴻ノ巣」の主人である及び奥田駒藏は西洋通で、美味しいコーヒーや様々な洋酒を集めるなど、様々な分野の芸術家たちやヨーロッパ帰りの人々を喜ばせた。当時、この分野でここを知らない者はいなかったという。「該里酒 (シェリー酒)」「菊正宗」「金粉酒」「薄荷酒」といった詩が生まれた。

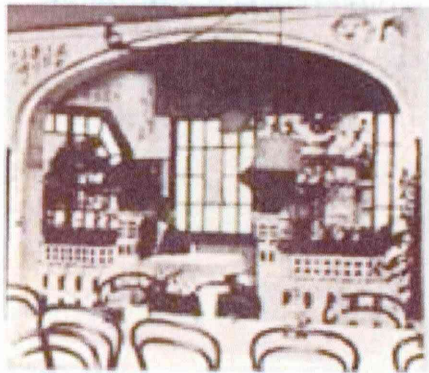


写真 1-2-6 カフェエ・プランタン (HP『喫茶店』)

「カフェエ・プランタン」(写真 1-2-6) は明治 44 (1911) 年、東京美術学校で黒田清輝に学んだ松山省三と平岡権八郎が、銀座煉瓦街の建物を改装したパリのカフェーを目指して開いた日本初のカフェーで、酒やコーヒー、そして女給をそろえた、会員制のカフェーである。黒田清輝、岡田三郎助、和田英作、岸田劉生、森鷗外、永井荷風、谷崎潤一郎、岡本綺堂、北原白秋、島村抱月、歌舞伎役者の市川左團次ら多くの芸術家たちが集う高級な店だった (関東大震災で焼けたこの店は一時、牛込神楽坂で営業し、そこに松山は当時欧米で流行っていた麻雀を持ち込み、日本でも流行らせたらしい)。



写真 1-2-7 カフェエ・ライオン (HP『ライ

オン』)

① また明治 44 (1911) 年には銀座尾張町角「カフェエ・ライオン」(現在の中央区銀座 5-8-1 で現在のビアホール・ライオン本店とは違う場所) (写真 1-2-7) や大正に入ると「カフェエ・タイガー」ができた。

彼らは主にアブサン、ワインなどの洋酒、日本酒、ウイスキー、ビールなど様々な酒を飲み、江戸と西洋の交叉を楽しんでいた。

その頃にはもう東京は洋服の似合う街になっていたのだろう。



地図 1-2-8 パンの会の足どり

3節 メンバー

(1) 木下柰太郎



木下柰太郎 (HP『伊東市 木下柰太郎記念館』)

- 1885 (明治 18) 静岡県 (現在の伊東市) に生まれる 本名は太田正雄
- 1892 (明治 25) 尋常小学校に入学
- 1898 (明治 31) 同校高等科を二年で終了 独協中学校へ入学 本郷へ住む
長田秀雄らと知り合う
- 1901 (明治 34) 長田秀雄らと回覧雑誌『溪流』を制作
- 1906 (明治 39) 東京帝国大学医学部へ入学
- 1907 (明治 40) 長田秀雄の紹介で新詩社の同人になり『明星』に作品を発表
年末に長田秀雄らと新詩社を脱退
- 1908 (明治 41) 森鷗外の観潮楼歌会に参加
パンの会を結成・開催 『屋上庭園』発行
- 1916 (大正 5) 南満医学堂教授兼奉天病院長として赴任
- 1921 (大正 10) 欧米留学
- 1926 (昭和 1) 東北帝国大学医学部教授となり仙台へ赴任
- 1927 (昭和 2) 『パンの会回想』を執筆
- 1937 (昭和 12) 東京帝国大学医学部教授となり再び本郷へ
- 1945 (昭和 20) 永眠

静岡で生まれ育った木下柰太郎は、長田秀雄と出会った頃から『文庫』『明星』など文学に惹かれ、中学卒業後は書家を志し、大学進学ではドイツ文学科を志望するが、どちらも家族に反対され医学部へ進学する。そもそも独協中学へ入学したのは、彼を医者にするためにドイツ語を学ばせようと家人が考えたからだったようだ。

医学部進学後も熱心に作家活動を続ける中、彼は薬物学の試験日を間違えてしまい追試

の交渉依頼をするために初めて森鷗外を訪ねることになる。陸軍医であり反自然主義高踏派作家であり、また文学の道を家族に反対されるという経緯の似ている部分で鷗外にも柰太郎はかなり影響を受けているものと思われる。

その後、新詩社の同人となった頃から北原白秋や吉井勇らと親しくなり、『明星』脱退後に『方寸』での活動を始めた彼は、パンの会の発起人となる。発起人の柰太郎は常にパンの会の開催場所を探し歩いた。

自由劇場の批評なども行い、小説や戯曲も書き、美術史の研究も行い、もちろん医者としても活躍し、多方面で才能を発揮した。晩年まで医学と文学の両方面へ熱い情熱を注いだ人物である。

少し話はそれるが、柰太郎の姉は、関西建築界では長老的な存在であった建築家の河合浩蔵（東京大学建築学科でコンドルから建築を学び、妻木頼黄と共にドイツへ渡り、その後司法省技師となる）の後妻。なお、柰太郎は河合浩蔵の先妻との間の娘と結婚している。

(2) 吉井勇



吉井勇 (『明治反自然派文学集 1』扉)

- 1886 (明治 19) 芝区高輪に伯爵の息子として生まれる
- 1891 (明治 24) 鎌倉師範付属小学校に入学
- 1900 (明治 33) 東京府立第一中学校 (現在の日比谷高校) に入学
- 1903 (明治 36) 落第し、攻玉社へ編入
- 1905 (明治 38) 攻玉社を卒業 『明星』に作品を発表
- 1906 (明治 39) 新詩社の歌会へ参加
- 1907 (明治 40) 早稲田大学文学部高等予科に入学 (政治経済科へ転じ、後に退学)
- 1908 (明治 41) 新詩社を脱退 パンの会結成 代々木に住む
- 1909 (明治 42) 『スバル』創刊、掲載
- 1910 (明治 43) 『酒ほがひ』発行
- 1921 (大正 10) 結婚
- 1933 (昭和 8) 離婚
- 1936 (昭和 11) 高知へ移り、国松孝子と結婚
- 1938 (昭和 13) 京都へ移る
- 1960 (昭和 35) 永眠

高輪の海に見える広大な邸宅に由緒正しき伯爵の孫として生まれた吉井勇は、十代の頃から短歌や俳句を作り、その一方で東京府立第一中学校を中退するなど奔放な生活を送る。

短歌が『明星』に載ったのを機に詩作も始め、新詩社に参加するようになると木下杢太郎や北原白秋、長田秀雄らと親しくなり、森鷗外や上田敏の存在を知るようになる。

彼らと関西や九州を旅し様々な影響を受けるが、一方で入学した早稲田大学文学部へ入学したがほとんど出席することなく政治経済科へ入学するも後に退学してしまう。

パンの会にはメインメンバーとして参加、『酒ほがひ』で耽美的歌人の地位を確立し、その後与謝野鉄幹・晶子や森鷗外の創刊した『スバル』でも活躍した。

生涯を通してその奔放な生き方は変わらず、二度の結婚や四国・九州への移住など、自由に生きてきたことがうかがえる。ちなみに一度目の結婚は伯爵令嬢であった妻が不良華族事件の当事者であったため離婚に至る。二度目の妻は浅草の料亭「都」の看板美人といわれていた孝子である。孝子は離婚によってどん底に突き落とされた勇に便りを送り、温かく見守るうちに土佐にまで出向き結婚したという。この再婚が彼に転機をもたらしたという。

この生き方からか、夢や空想世界に憧れ、現実逃避、感傷的、甘美的な作風も見られる。晩年は京都の隠居生活のかたわら、創作活動に励み、肺ガンで亡くなる。

(3) 長田秀雄



長田秀雄（『明治反自然派文学集1』扉）

- 1885（明治 18） 神田神保町に生まれる
- 1898（明治 31） 麹町富士見小学校を卒業し独協中学校へ入学
木下杢太郎らと親交を深める
- 1903（明治 36） 独協中学校を卒業後、明治大学に籍をおく
- 1906（明治 39） 新詩社に加わり『明星』に詩を発表
- 1908（明治 41） 新詩社を脱退
大阪の医学専門学校を受験するも失敗
- 1909（明治 42） 『スバル』に誌が掲載される
パンの会に参加
- 1910（明治 43） 戯曲『歓楽の鬼』を発表
- 1911（明治 44） 『歓楽の鬼』が自由劇場で上演される
- 1918（大正 7） 島村抱月に招かれ芸術座の脚本部員になる 短編小説集を刊行
- 1919（大正 8） 芸術座解散
小山内薫や吉井勇らと国民文藝会を結成
- 1920（大正 9） 市村座に参加
- 1929（昭和 4） 劇団喜劇座を結成
- 1934（昭和 9） 新協劇団を結成
- 1949（昭和 24） 胃潰瘍で没す

長田秀雄は詩人、小説家であり劇作家である。詩の分野では木下杢太郎や北原白秋と共に新詩人の三羽鳥と言われていた。

祖父は熊本菊池神社の神官で国学者であり歌人であった。秀雄が文学に興味を持ったきっかけは祖父のこともあるのかもしれない。

しかし、医者であった父は彼に家を継がせようと、無理矢理、医学専門学校を受験させ

る。独協中学に入れたのも木下杢太郎と同様、医学の道に進めるためにドイツ語を学ばせようとしたのかも知れない。

ただ、独協中学校で木下杢太郎らに出会った秀雄は在学中から文芸に強い関心を持ち、父の意向に背くことになった。

パンの会結成後、弟の長田幹彦に連れられてパンの会に参加するようになった秀雄は次々と作品を発表していく。『歓楽の鬼』を発表することにより、劇作家としての第一歩も踏み出した。自由劇場での上演は世の注目を集めた。

その頃から、詩や小説の創作も行いながら、どんどんと劇作家の道を進み、ヨーロッパ近代劇を目指す新劇運動に参加した。

彼はパンの会結成時のメンバーではなかったが、参加し出してからは中心メンバーとなった。小山内薫や市川左団次、市川猿之助との出会いは彼の劇作家としての人生に大きな影響を与えたのではないだろうか。

(4) 長田幹彦



長田幹彦（『明治反自然派文学集1』扉）

- 1887（明治20） 麹町に生まれる
- 1900（明治33） 東京高等師範附属小学校を卒業
同中学校（現在の筑波大学附属高等学校）へ入学
- 1906（明治39） 早稲田大学英文科に入学
新詩社社友となり『明星』に小説を発表
- 1908（明治41） 新詩社を脱退
- 1909（明治42） パンの会に参加 休学して東北・北海道を流浪
- 1910（明治43） 『スバル』に小説や戯曲を発表
- 1911（明治44） 木下杢太郎に連れられ森鷗外を訪問
- 1912（明治45・大正1） 京阪地方へ流寓
- 1915（大正4） 『祇園夜話』『鴨川情話』の刊行
- 1925（大正14） 東京中央放送局が創設されラジオドラマを書き始める
- 1929（昭和4） 日本ビクター蓄音機株式会社の顧問となり作詞をする
- 1964（昭和39） 死去

長田幹彦は前述した長田秀雄の弟である。

中学を卒業後、札幌農学校への進学を希望したが、父親の反対により早稲田大学英文科へ入学する。休学中は鉄道工夫、炭鉱の帳づけ、旅役者の群に身をおきながら東北や北海道を放浪し、また卒業後も大阪や京都をまわる。特に京都に興味を持ち、祇園の茶屋に入り浸り、舞妓たち親しくなる。それらの旅の生活から生まれた小説（『滯落』『祇園』など）も発表している。京都を舞台にした作品が多い。

『祇園夜話』『鴨川情話』の刊行で頹唐享楽の作家として世で知られるようになるが、後に遊蕩文学と指摘され通俗作家に転向し、晩年はラジオドラマや作詞など文壇からは遠ざかっている。

(5) 谷崎潤一郎



谷崎潤一郎 (HP『日本音声保存』)

- 1886 (明治 19) 東京日本橋に生まれる
- 1901 (明治 34) 阪本尋常小学校卒業
府立第一中学校 (現在の日比谷高校) に入学
- 1905 (明治 38) 府立第一中学校卒業 第一高等学校英法科文科に入学
- 1908 (明治 41) 第一高等学校卒業 東京帝国大学国文科に入学
- 1910 (明治 43) 小山内薫らと『新思潮』創刊 『刺青』出版
- 1911 (明治 44) 東大中退
- 1915 (大正 4) 石川千代と結婚
- 1921 (大正 10) 小田原事件
- 1923 (大正 12) 関西へ移住
- 1924 (大正 13) 『痴人の愛』出版
- 1930 (昭和 5) 石川千代と離婚
- 1931 (昭和 6) 丁未子と結婚
- 1934 (昭和 9) 丁未子と離婚
- 1935 (昭和 10) 松子と結婚
- 1943 (昭和 18) 『細雪』の発表を開始
- 1949 (昭和 24) 文化勲章受賞
- 1965 (昭和 40) 腎不全で死去

谷崎潤一郎は裕福な家に生まれ、幼少期から坊ちゃんとして育てられた。祖父久右衛門は一代で産をなした進取の気性の商人であったが、父倉五郎は商才がなく度々事業に失敗し、潤一郎が小学校を卒業する頃には中学への進学が危ぶまれるくらい実家の経済状況は悪化する。しかし、優秀であった潤一郎は教師たちの配慮により家庭教師をしながら中学へ進学し、一年飛び級をして卒業できるほどの秀才であった。

大学へ入り、島崎藤村らの自然派の運動が下火になった頃には、反自然主義の筆頭であった潤一郎は、『刺青』『麒麟』『秘密』などを発表し、『三田文学』において永井荷風に賞賛され、華々しく文壇に登場する。

美しい母に従順な父のもとでフェミニスト傾向を育てた彼の作品は、倫理をこえて女性の官能美を称え、美の前にひざまづく作風が貫かれている。その構想や題材、美しい文章は耽美派らしいものであった。

妻千代をめぐる佐藤春夫とのトラブル（小田原事件）の後、関西に移住した潤一郎はそこに残る伝統的な文化や面影を魅力的に感じ、この環境の変化と女性関係は彼の作風に大きな変化をもたらした。現にその後の作品である『痴人の愛』『春琴抄』『細雪』は舞台が関西であったり、女性美を追求している。

(6) 石井柏亭



石井柏亭 (HP『帝銀事件ホームページ』)

- 1882 (明治 15) 東京下谷仲御徒町に生まれる (本名は満吉)
- 1887 (明治 20) 私立島本小学校へ入学
- 1892 (明治 25) 小学校卒業 下谷小学校高等科へ転入
日本美術協会へ《八郎弓勢之図》を出品
- 1894 (明治 27) 《長年尽忠図》を発表 (宮内庁に買い取られる) 共立中学へ入学
- 1895 (明治 28) 中学中退 大蔵省印刷局工生として入局
- 1902 (明治 35) 『明星』に挿絵寄稿 与謝野夫妻に出会う 時評も始める
- 1904 (明治 37) 中央新聞に入り挿絵を担当 東京美術学校選科へ入学
- 1905 (明治 38) 眼病のため退社退学 『明星』に詩を発表
- 1907 (明治 40) 山本鼎・森田恒友らと『方寸』創刊
- 1908 (明治 41) パンの会結成 『スバル』に詩を発表
- 1910 (明治 43) ヨーロッパへ
- 1914 (大正 3) 二科会 (二科展) 結成
- 1922 (大正 11) アメリカへ 東京帝国大学工学部講師になる
- 1954 (昭和 29) ヨーロッパへ
- 1958 (昭和 33) 永眠

洋画家であり美術評論家であった石井柏亭は日本画家の祖父鈴木鷺湖、父石井鼎湖を持ち、恵まれた環境で育つ。

10歳で絵の模写などを始め、11歳のときに父親の指導により日本美術協会への出展を始め、12歳のときに描いた絵は宮内庁に買い上げられるなど早熟ぶりがうかがえる。その頃の柏亭は日本画を描いていた。

父親の勤めていた大蔵省印刷局で彫刻などの修行を始めたことが洋画への道を進むきっかけとなる。

また独学で水彩画を学び始めた柏亭は、浅井忠のもとで本格的に水彩画を学び、洋画を始めて発表することになる。

やがて彼は油彩画をも手掛けるようになるが、一方では、東京美術学校の浅井教室の助教授であった小坂象堂の自然主義的日本画の影響を受けている。

そんな彼にとって『明星』との関係はとても強いものだった。最初は挿絵だけであった彼の『明星』内での活躍は批評にまでおよび、ここから彼の才能は挿絵、批評、本の装丁など多方面にわたるものとなる。

そして『明星』を通して親しくなった山本鼎らと美術雑誌『方寸』（写真 1-3-6）を創刊し、その会合からパンの会を結成する。



写真 1-3-6 『方寸』表紙（HP『山田書店』）

パンの会の影響からか、彼は『方寸』『スバル』を舞台に詩を書くようになる。『スバル』

には渡欧通信も掲載している。

「扁さへ昨夜のままなる
階上のをぐらき一間
洋めしき大花紋の
長椅子の褥のなかに、
天つ日の光を避くる
骨細き身をば埋めぬ。

棚のうへ三つ四つ載せし
アルバムの黄金の縁は
うす光り、布哇の島に、
溶岩の焼けて流るる
小額も、床の一軸
淡彩の絵もおぼめける。

定めなき想の路を
秋の雲ただよふ心地、
大川を（水こそ見えぬ）
行き通ふ巡航船の
吐く息も忙しげなるは、
定齋の担ひの音か。

河岸をちから車の
軌る聲、金谷の庫に
鉄板を重ぬるひびき、
をりをりに耳打つばかり、
要もなき身は永からぬ
日の果を待ちわぶるなる。」

（『明治反自然派文学集 1』石井柏亭 P383）

という隅田川の詩も残している。

また東大建築学科の講師も勤めており、建築二八会での内田祥三、佐野利器、前川國男、谷口吉郎らとの交流もあったようだ。

これらのことから、彼の多方面での才能や人とつながりはパンの会、その後の文学界にも必要不可欠なものであったことがわかる。

(7) 山本鼎



山本鼎『自画像』(HP『山本鼎記念館』)

- 1882 (明治 15) 愛知県岡崎市に生まれる
- 1887 (明治 20) 浅草山谷に住む
- 1892 (明治 25) 小学校尋常科を卒業 桜井暁雲(虎吉)方に弟子入り
- 1901 (明治 34) 報知新聞社に入社
- 1902 (明治 35) 東京美術学校西洋画科選科入学
- 1903 (明治 36) 石井柏亭のもとへ下宿
- 1907 (明治 40) 石井柏亭や森田恒友らと『方寸』創刊
- 1908 (明治 41) パンの会結成
- 1912 (明治 45・大正 1) フランスへ遊学 エコール・ド・ボザールに入学
- 1917 (大正 6) 北原白秋妹いゑ子と結婚 日暮里に住む
- 1919 (大正 8) 農民美術練習所を長野県神川小学校に開講
- 1921 (大正 10) 農民美術練習所「蒼い屋根の工房」完成
- 1922 (大正 11) 農民美術講習修了者による生産組合を組織
- 1946 (昭和 21) 長野で死去

山本鼎は版画家、洋画家であり、また教育者である。

漢方医であった父親は鼎が生まれると間もなく、医師資格取得に必要な西洋医学を学ぶため、森鷗外の父・静男が経営する医院の書生となった。そのため鼎も母と共に上京、浅草区山谷町に移住した。

小学校を卒業した鼎は、浜松町の木版工房で桜井虎吉の指導を受けながら、版画職人として自立する道を歩み始める。その後に父が長野県上田市に医院を開業、彼にとって上田は第二の故郷となった。

木版工房で修業した後、東京美術学校西洋画科選科予科に入学し版画の世界から洋画の世界に身を移す。

在学中、『明星』に版画を発表し、新進気鋭の版画家として注目された。それまでの版画は、絵を書く者、版を彫る者、刷る者の三者合作であったが、鼎はそれを一人で行う個性的な創作版画を試みたのである。

また、鼎は石井柏亭、森田恒友と雑誌『方寸』を創刊するが、もともと貧しかった彼の生活にこの発行はかなり負担だったようだ。

そしてそこからパンの会の発起人となる。パンの会は3年半ほどで終わりを告げるが、鼎はパンの会時代に「生温き日」（『スバル』3号）、「製版所にて」（『方寸』3巻3号）の詩を発表している。彼の文学的才能は後の小説にも見られるように豊かであった。

その後、石井柏亭の妹である光子との結婚を石井家から拒絶されたことがきっかけで鼎はフランスに渡る。フランスでも彼の生活は非常に貧しく苦しかったようだ。

帰国後、彼は北原白秋の妹であるいゑ子と結婚する。

結婚前から彼は白秋の詩の挿絵を書くなど、パンの会の中でもかなり親しい間柄であった。白秋の葬儀の際は長野から上京し、葬儀委員長まで務めている。

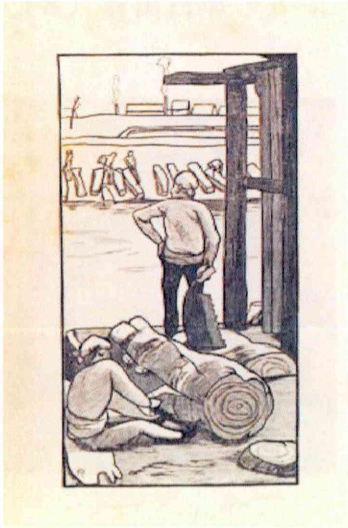
大正初期、フランスへ渡った時も鼎は多額の借金に苦しんだ鼎であったが、帰国後も農民美術の事業などで再び莫大な負債をかかえ、三越などで度々個展を開くも貧しい生活が続いた。

「冬の終りにして
南風生温き日よ
波高き大川上る船は皆帆膨らまし
いつとなく姿縮めて、遠方の
黄濁空に懶くも霞みゆくなる。
また、橋の下を見てあれば
煉瓦を積める船の艫、
児を負ひて舵執る人は若くして、
今し男は帆を張らむとす、
錆たる鉄筒のうちコークスの焰はゆらぐ。」

(HP『山本鼎記念館』山本鼎)

上の詩は鼎の『生温き日』の最初の一節である。この詩には砂利場、共同便所、鉋屑などのほかに、汚れた少女や葬式の列などが出てきて、隅田川のほとりの下町風景が写実的に歌われているかのように見える。

しかし、上の版画のように鼎は「児を負ひて舵執る人は若くして」と優しい眼差しを彼に送りながら、その背後の家庭や妻の存在を見ている。



絵 1-3-7-1 『真昼』 (HP『山本鼎記念館』山本鼎)

この『真昼』(絵 1-3-7-1) という作品では、木陰の向こうに大川が流れ、帆の準備をしている船が描かれている。白シャツ姿の男の背中が小さく見えるが、この作品から「生温き日」の詩的世界を想像することは容易ではない。セピア色と黒と白との調和が美しく、おだやかで日常的な風景なのである。

この相反する詩と版画の作品が彼の中の東京と江戸という矛盾を表現しているのではないだろうか。(以上 HP『山本鼎記念館』抜粋と書き加えたもの)

(8) 倉田白羊



倉田白羊 (HP『Wikipedia』)

倉田白羊(本名は重吉)は1881年(明治14年)生まれの洋画家で自然をテーマにした作品を多く発表した。山本鼎の農民美術運動の協力者でもあった。

漢学者である父親の息子として埼玉県浦和に生まれた白羊、1894年(明治27年)、洋画家・浅井忠の門下生となる。この頃、同じく浅井の門下生だった石井柏亭と知り合い、親しくなる。

1896年(明治29年)に浅井が東京美術学校の教師として迎えられたため、1898年(明治31年)に倉田もこれを追うように入學し、1901年(明治34年)に首席で卒業。

1902年(明治35年)頃から、作品を発表するかたわら、中央新聞社を経て時事新報社に勤務し、カットや美術展評などの仕事を行った。

1907年(明治40年)には、第一回文部省美術展覧会に入選し、彼の活動はますます活発になっていく。

翌年には山本鼎、石井柏亭、森田恒友による美術文芸雑誌『方寸』に参加し、そこから発生した「パンの会」にも参加。

そうしてどんどん美術界での評価も上がっていき、1915年(大正3年)には日比谷美術館で個展も開いている。

その後、朝鮮と満州を旅した白羊は、旅行の中で大自然の魅力に取りつかれ、1922年(大正11年)には、山本鼎に日本農民美術研究所の副所長として招かれ、長野県上田市に移住する。作品を発表しながら、その中で農民美術運動の指導にもあたっていた。

やがて、糖尿病が悪化し右目を失明するが絵は描き続け、1938年(昭和13年)に死去。

(9) 森田恒友



森田恒友 (HP『埼玉新聞』)

洋画家、森田恒友は1881(明治14)年、埼玉県熊谷市の裕福な旧家に生まれた。

幼いころから成績は優秀であり、大里尋常高等小学校では高等科の1年から3年へ飛び級するほどの秀才だった。

東京で絵の修業をしたいという希望を父親に反対され、熊谷中学へ進学。胃病のため中途退学し、自宅で療養した。この間、家業を手伝いながら、新聞雑誌の挿絵の模写に励んでいた。

1901(明治34)年、画家を志して上京し、小山正太郎の主宰する画塾『不同舎』に学び、また、中村不折に師事した。

1902(明治35)年、東京美術学校西洋画選科に入学、卒業後も研究科に進むが、1907(明治40)年、研究科を退学し、石井柏亭、山本鼎らと美術誌『方寸』を創刊して、同誌に挿絵や芸術論を発表した。翌年、柏亭、北原白秋らとパンの会創設。同年、太平洋画家にも制作を発表し、挿絵画家としても活躍した。

後に「恒友は友人の集りには必ず出た。宴会もかかしたことの無い方だ。しかしそう陽気にはしゃがない、ニヤニヤ笑いながらみんなの騒ぐのを、室の隅の方で見ている方である。それでも友人に好かれた。彼の存在は友人たちにとって春風のようなものであった。」(HP『埼玉新聞』)と彼の友人である石坂養平は語っている。

1908(明治41)年には雑誌『サンデー』に入社し政治漫画を担当し、その後、大阪の帝国新聞社に入ったが再び上京している。

1914(大正3)年から絵の勉強のため欧州に渡り、印象派を学び、ポール・セザンヌに強く影響を受ける。

1929(昭和4)年には帝国美術学校(現・武蔵野美術大学、多摩美術大学)の創設とともに洋画科主任教授となり、多くの後進を育て、1933(昭和8)年に死去。

また、名文家としても知られ、雑誌等に折々執筆した随筆などを集め『恒友画談』『画生活より』『平野雑筆』等が没後、刊行されている。

(10) FRITZ RUMPF



FRITZ RUMPF (『方寸』第四号表紙)

フリッツ・ルンプは明治42年にドイツの博物館に日本の美術館の仕入れを依頼されて東京にやってきた、井上凡骨の弟子である。

同年、たまたま井上凡骨をたずねてきた木下杢太郎の紹介でパンのかいに参加するようになった。

国際都市・上海から日本に渡り、歌舞伎や木版画を学び、漢字と日本語を覚え、寄席に行き、風俗画を描いた彼はパンの会に溶け込み、人気者になったと木下杢太郎は言う。

木下杢太郎と吉井勇はルンプの詩まで残してる。

「雨のあとの濡れた柳の
陰の燈の緑色の寂しいことよ。
予は窓より市街の一角を眺めて、
厚い麦酒の杯を口にするとき
ふと心に浮ぶ。異國なるわが友 FRITZ RUMPF

薄明の如きその回想の世界は
まだ夜であつた。雨が降つてた。彼の
大きな西班牙外套に両つ體を入れて
燈の明き寄席を出て暗い道を歩いた。

故しらず予等の心は激してゐた。
美に対するこがれと、
世に対するうらみと、
多分さうであつた、心の澱は。

(RUMPF どこかで酒を飲まう。) 予は日つた。

(いいです、いいです。それ可いです。)

彼は答へた。

(給仕、麦酒だ。) と、予等はどなつた、
或る小さい料理屋の卓につくや否や。
ねむたげなる給仕は会計台から立ち、
その時も亦二つの大杯を運んで来た。

(RUMPF お前は胃國の男だ、
然し“RUMPF” お前は熟くおれ達の心が分る。
それは「青年」に國籍がないからだ。

RUMPF まづ飲め、そして當てて見ろ、
何が一體この俺を近来こんなに悩ますかを。)

彼れ RUMPF は怪しく笑つた。

そしてその赤い顔に麦酒の大杯を運んだ。……」

(『パンの会』 野田宇太郎 P201)

若者に国境がないことを歌い、ルンプをいかに慕っていたかがわかる。

西洋と東京という両方の要素を取り入れ、異国情調をうたつたパンの会らしく、メンバーも様々な人がいることで、彼らは刺激し合っていたのだろう。まだ西洋人が珍しかったこの時代、ルンプはとても珍しい人種であった。彼がパンの会に与えた影響は大きかっただろう。

そして、この会が彼をしばらく日本にとどめたひとつの要因であったのではないだろうか。彼の目に東京は浮世絵と故郷であるヨーロッパが混ざって見えていたのかもしれない。

(11) その他

その他にも北原白秋（後述）、高村光太郎（後述）、永井荷風（後述）、上田敏、小山内薫、俳優の市川左団次、市川猿之などが主なメンバーであった。

武者小路実篤や郡虎彦、小杉未醒、本井長世、岸田劉生、黒田清輝、木村壮八、与謝野鉄幹、井上凡骨、鈴木鼓村、岡田一平、平出修、小宮豊隆、島村盛助など多くの若き芸術家たちが参加した。

例え耽美派ではなくても、そこに数回だけでも参加した作家たちは多くおり、パンの会は多かれ少なかれ日本の近代文学、近代芸術の基礎に影響しているといえよう。

メンバーたちは東京出身者から、地方出身者まで様々で、その違いが東京の描き方、作風に大きく影響しているといえる。

また、育った家の環境や芸術家同士の出会いが、作品や作風だけでなくその後の人生（結婚や所属）に大きく影響を与えている人物も多い。

3章 『屋上庭園』

新鋭の詩人として三羽鳥とも言われるほど仲のよかった木下杢太郎、北原白秋、長田秀雄は特に仲良く、同じ主張を持つものだけで詩の雑誌を出版しようとする。

この時期、『方寸』と『スバル』はすでに出ていたが、パンの会としての機関紙はまだなかったこともこの雑誌の企画をより現実的にしたのかもしれない。

「その夜白秋の提案した『屋上庭園』と云ふ題が面白く、如何にも都会情調的な気持ちもよく表現してゐるところから」

（『パンの会』野田宇太郎 P215）

『屋上庭園』というタイトルは決定する。いかにもパンの会のメンバーらしいタイトルである。

表紙は白馬会で洋画の父と仰がれていた黒田清輝に依頼している。パリの画風を日本に持ち込んだ黒田清輝は木下杢太郎や長田秀雄にとって尊敬すべき、憧れの存在であった。そんな彼らの熱意をきき、そのデッサンを黒田は快諾する。

発行するには500部で40円が必要であったため、秀雄と杢太郎は20円ずつ負担している（その時、白秋の実家が破綻していたため、二人だけの負担となった）。当時の20円は学生がひとり十分にひと月遊学できる金額であった。

同人誌ではあったものの、売ることも考えて作っていたため、広告も出している（写真1-3-3-1）。



写真 1-3-3-1 方寸の広告（HP『山本鼎記念館』）

こうして明治42年9月1日に発行された『屋上庭園』の内容はどの作品もパンの会らしい耽美的なものばかりで、杢太郎は『食後の唄』、白秋は『東京景物詩』に後に含まれる詩を掲載した。新しいスタイルの情調と官能の詩として注目された作品であったようだ。

そんな第一号をステップとして、第二号も企画される。

前の年に日本に帰り、『あめりか物語』『ふらんす物語』を出版し、文学界の新生として登場した永井荷風、象徴詩の新しいスタイルを作り出した蒲原有明、山崎春雄にはエッセイをという計画であった。

彼らはこの時点で荷風との面識はなかったようだが、自分たちの計画を伝えれば、きっと協力し、作品を掲載してくれるだろうと考え、荷風に会いに行っている。その時、彼らは『あめりか物語』『ふらんす物語』を書いた荷風であるから、西欧的な風貌でハイカラな場所に住んでいると思っていたが、実際会ってみると予想とは違い、地味な羽織と袴で、部屋も古風な支那趣味なものばかりであったと後に杢太郎は語っている。そんな荷風であったから、彼らをより惹きつけたのではないだろうか。

第二号は明治 43 年 2 月に発行されている。表紙は前回同様、黒田清輝であった。内容は異国情調をテーマとする杢太郎の『日本在留の欧羅巴人』から始まり、アメリカでの生活を綴った荷風の『西班牙料理』などであった。

しかし、白秋の掲載した『おかる勘平』という作品のせいで第二号は発行禁止になってしまう。『おかる勘平』は明治 42 年秋の松本楼のパンの会の際に発表し、江戸情調の色の濃いものであったが、風俗壊乱という理由によって問題視されてしまった。

「おかるは泣いてゐる。

長い薄明のなかでびろうど葵の顛へてゐるやうに、
やはらかなふらんねるの手ざはりのやうに
きんぼうげ色の草生から昼の光が消えかかるやうに、
ふわふわと飛んでゆくたんぽぽの穂のやうに。

泣いても泣いても涙は尽きぬ、
勘平さんが死んだ、勘平さんが死んだ、
わかい奇麗な勘平さんが腹切つた.....

おかるはうらわかい男のにほひを忍んで泣く、
麴室に玉葱の噓せるやうな強い刺戟だつたと思ふ。
やはらかな肌ざはり五月ごろの外光のやうだつた、
紅茶のやうに熱つた男の息、
抱擁められた時、昼間の塩田が青く光り、
白い芹の花の神経が、鋭くなつて真蒼に凋れた
顛へてみた男の内股と吸はせた唇と、
別れた日には男の白い手に烟硝のしめりが沁み込んでゐた、
駕にのる前まで私はしみじみと新しい野菜を切つてゐた.....

その勘平は死んだ。

おかるは温室のなかの孤児のやうに、
いろんな官能の記憶にそそのかされて、
楽しい自身の愉快に耽つてゐる。

(人形芝居の硝子越しに、あかい柑子の実が秋の夕日にかがやき、
黄色く霞んだ市街の底から河蒸気の笛がきこゆる。)

おかるは泣いてゐる。
美しい身振の、身も世もないといふやうな、
迫つた三味に連れられて、
チヨボの佐和利に乗つて、
泣いて泣いて溺れ死にでもするやうに
おかるは泣いてゐる。

(色と匂と音楽と。
勘平なんかどうでもいい。)」

(『明治反自然派文学集1』北原白秋 P133)

「顛へてゐた男の内股と吸はせた唇と、」の部分である。

その後、第三号が発行されなかったのは、この事件が彼らにとって大きな打撃となつてしまったことだと思われるが、もしかすると、こんな若者の表現の自由すら許されない当時の東京に幻滅していたからなのかもしれない。

4章 岩村透『巴里の美術学生』

(1) 岩村透



岩村透 (HP『岩村透』)

1870 (明治 3) 年、東京の小石川に生まれた。

父は男爵岩村高俊で、宇都宮権参事、佐賀権令、愛媛県令、内務省大書記官兼戸籍課長、石川県令等を歴任、有栖川宮家々令、台湾問題解決のため、遠く清国に使用するなど、多くの功績を残した人物であった。

弟は長谷部竹腰建築事務所(後の日建設計)創始者の竹腰健造である。

1876 (明治 9) 年、福沢諭吉の経営する慶應義塾幼稚舎に入学し、英語、図画、音楽等を学んだ。当時の教育は読み書きやそろばんを中心とするものだったため、慶應の情操教育が透の人生を左右する重要な場所だったのかもしれない。

1884 (明治 17) 年、幼稚舎を卒業し同人社に入学。翌年には東京英和学校 (現在の青山学院大学) に転じている。そこで徹底した語学の研修に励み、彼の英語はより一層磨きがかかったものとなる。

1888 (明治 21) 年には恩師のアメリカ帰国に伴い、渡米し、美術研究を本格的に行うようになる。1891 (明治 24) 年にはパリに渡り、黒田清輝や岡田三郎助 (共に帰国後は白馬会を結成する) らと交流を持った。翌 1892 (明治 25) 年に帰国。

1893 (明治 26) 年に東京英和学校となり、1894 (明治 27) 年に明治美術学校での西洋美術史の講師を経て、1899 (明治 32) 年に東京美術学校で西洋美術史を教え、1903 (明治 36) 年に教授に就任。彼の美術史と英語の授業は生徒に大人気で、この講義を聞くために入学したという学生まであったという数々の逸話が未だに残っている。他にも郵便電信学校、慶應義塾大学等で美術や英語の教師をした。

彼は当時の若者たちに大きな影響を与えている。そのひとりである高村光太郎は

「岩村透先生がフランスから帰ってきて何もかも新式だというので旋風を巻き起し、

その上頭も良かったのでまるで学校中を掻き廻すような有様であった。いろんなことをやり出した。美術学校を専門学校にするにはもっと勇敢にやらねばならぬという風に、思いきりやり出したのである。それは大へんな勢力であった。正木先生は困ったであろう。色々なことから正木先生と岩村先生がとうとう衝突してしまった。美術学校記念日の美術祭なども祟った。この美術祭には岩村先生が大いに力を入れて二三日間も続き、飾物も出来る運動会もやる仮装行列もやるという風で、僕らは裸体になって活人画をやった。こんな事から後に岩村先生は学校を辞めることになってしまった。幾度かこういうふうに学校の空気が変わって最後にもっと合理的な境地が出来、それで平凡なものに治まった。

(中略)

僕はまたどうしても文学的なものから抜け切れず、浅草の玉乗りの少女の情景を作ったりしていた。こうしてこの研究科を二年ばかりやったのであるが、考えて西洋画科へ再入学した。此の時には岡本一平、藤田嗣治、近藤浩一路、田中良などの連中と一緒にであった。田中君とは藤島塾で木炭画の稽古を長い間やったことがある。

そうこうするうちに岩村透先生からフランスへ勉強に行ったらどうだ、と進められたが僕にはそんな金がない。その頃アメリカあたりに博覧会があって、向うには懇意な人々がいるから紹介状を二三本持って行けば何処かで使って呉れるだろうというような話であったが、とてもまだ僕自身にはそんな勇氣はなかった。ところが親父の方がその話に乗気になり、齢を取ってからでは不安であるが、今の中なら大丈夫だ、と言い出した。初め岩村先生は二千元を拵えろといい、二千元あれば旅費と向うに行って一時就職する迄の費用はあると言う。そうしてみると親父の方が一生懸命で、何でもかんでもやろうと、とうとう僕もその時始めて背広服というものを作ったのである。」

(HP『美術学校時代』高村光太郎)

と語っており、光太郎の渡仏に透の存在はかなり重要だったことがうかがえる。

(2) 『巴里の美術学生』

1901 (明治 34) 年から新聞に掲載され、1903 (明治 36) 年に上梓した小冊子である。当時のパリの様子がかかれ、多くの若者が読んだという。東京にカフェーやサロンという考え方を持ち込んだ冊子である。

「巴里のみにあつてほとんど他の都に見ることの出来ぬものが一つある。これが美術家の生活である。

(中略)

他の社会と異なつた一種固有の美術家の生活をやつて居るのは巴里のほかにはない。」

〔芸苑雑稿 巴里の美術学生〕岩村透 P3)

という、他の都市とは異なる芸術の都パリを、彼の渡仏経験から書いている。

パリには美術家たちが団体を結び、朝から晩まで美術のことを考えていられる環境があること、そしてその固有の社会層を作ることができるほど、美術をやっている人間がパリはいるということ、政府の美術学校があり、美術館や図書館もあり、カフェーやクラブ、サロンも充実していることや、画廊がたくさんあり個展を開くスペースがあることなどをこの冊子から知った日本の文芸界を志す若者たちは、パリに大きな憧れを抱いたに違いない。

また、技術ある者は人種を問わず、受け入れられ、尊敬され、やる気のない者はただ落ちていき、しかし美術を志すものは誰からも縛られずにみんな自由に生きている。それは例えば日本の職人氣質の美術学校の教師からすると、一見怠惰に映るかもしれないが、その自由さが芸術都市パリを生んだということを書いている。

それは東京もパリのような場所にといい岩村の想いと、古い東京の体制を批判しているようにとれる。

この人気教師の書いた冊子は、多くの東京の学生の心をつかんだことだろう。

(3) パンの会に与えた影響

野田宇太郎は『パンの会』P11で次のように書いている。

「このやうな欧羅巴主義の移入を促進せしめたものとして私は岩村透が明治三十六年に上梓した『巴里の美術学生』と云ふ小冊子のあることを忘れない。この本は当時の美術学生に限らず多くのアマトウル*青年に多大の影響を与へてゐる。東京に藝術家の集るやうなクラブやサロンが殆どないことを慨いたのも岩村透であつた。そして後に龍土会と称され日本自然主義作家と称される人々の温床ともなつた藝術家の会合をはじめたのも岩村透であつた。彼は初めて巴里に於けるカフェエの役割を日本にも教へたのであつた。

パンの会はさうした意味の、東京を巴里とし、隅田川をセエヌ河になぞらへ、カフェエを求めたところの会として出発した。勿論それは無為なことであつたが、その代りに情調を求め三州屋とか永代亭の会となつたのであつた。そこには明治初年のエキゾチシズムの残渣(ざんさ)や下町的浮世絵趣味がこびりついた西洋料理屋が発見されて、彼等の能動的な新しい異国情調を幾分満足せしめることとなつたのである。」

(*「アマトウル」とは素人のこと)

東京をパリのやうな都市にしたいという想いが生まれたことや、隅田川をセエヌ川におきかえ、西洋料理屋をカフェエにするという彼らの発想には、『巴里の美術学生』の影響が強かつたことが読みとれる。

また、彼らの新しいものを完璧にパリの真似をして作ってしまうのではなく、どこか江戸らしさを残して東京を作ろうとする彼らの想いを生んだのではないだろうか。

もちろん、黒田清輝に『屋上庭園』の表紙を依頼したことや、高村光太郎がフランスへ行った後にパンの会に参加することになったことにもつながっていることは確かである。

2章 作家たちの作品全体から読む傾向

この章ではパンの会の作家たちが描いた作品全体の傾向を読んでいく。
東京を描いた作品はもちろん、描いた場所の特定できない作品も含めるものとする。

1節 香り

「一匙のここあのにほひなつかしく訪ふ身とは知らしたまはじ」

(『桐の花／酒ほがひ』北原白秋 P21)

「吸差の煙草の口の金がちるあえかにきたる河風のため」

(『桐の花／酒ほがひ』吉井勇 P325)

特に詩や短歌に多く見られる傾向として、そのときの香りが描かれていることがあげられる。季語として入れなければならない植物の香りはもちろん、珈琲の香りや煙草の香り、ロウソクや煤煙、台所の香りなどの様々な香りが描かれている。

これはパンの会が自然主義に対して反自然主義で耽美的であったため、日常をより美しく描くために必要な視点であったと考えられる。理由として、香りの表現を加えることにより、文章はより高尚な雰囲気表現になったり、ひねりを加えた芸術的なものとして読まれるようになるからではないだろうか。

まず、ここで例に出した『桐の花』の短歌は一杯のココアの香りを懐かしんでまた訪れてしまったとは、あなたは思わないでしょう、という意味を持つ歌で趣味、そして優雅さを表している。そこにはパンの会の特徴である耽美的という彼らの思いが込められていることがわかる。

次の『酒ほがひ』の歌は明治42年10月23日午後5時から日比谷公園の松本楼で開催されたパンの会の場で読まれた歌である。風がふいてかすかに吸いかけの煙草の香りがする、という歌で、この時の日比谷の様子を目で見ただけでなく、香りによって歌っている。変わりゆく東京に目を背けてみると、昔と変わらない香りがあるという読み方もできるのではないだろうか。これは変わらない東京の姿を彼らが必死に探していたようにも思える歌である。

「黄のほてり、夢のすががき、
さはあまきうれひの華よ。
ほのに汝を嗅ぎゆくここち、
QURACIOの酒もおよばじ。

いつはあれ、ものうき胸に
痛知るささやきながら、
わかき火のにほひにむせて
はばたきぬ、快樂のうたは。

そのうたを誰かは解かむ。
あえかなる罪のまぼろし、——
濃き華の裾に沁みゆく
愛欲の千々のうれひを。

向日葵の日に蒸すにほひ、
かはたれのかなしき怨言
ゆるやかにくゆりぬ、いまも
絶間なき火のささやきに。

かくてわがこころひねもす
傷むともなくてくゆりぬ、
あな、あはれ、汝が香の小鳥
そらいろのもやのつばさに。」

〔北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集〕北原白秋 P60)

この『邪宗門』の「煙草」という作品も向日葵の香り、火の香り、人の香り、そして、
きっとそこに漂っているであろう煙草の香りが描かれている。
それにより、そのときの切ない感情を表現している。

2節 酒

「Eau-de-vie de Dantzick,
黄金浮く酒
おお、五月、五月、小酒盞、
わが酒舗の彩色玻璃、
街にふる雨の紫。

をんなよ、酒舗の女、
そなたもセルを着たのか、
その薄藍の縞を？
まつ白な牡丹の花、
触るな、粉が散る、匂ひが散るぞ。

おお、五月、五月、そなたの警は
あまい桐の花の下の豎笛の音色、
わかい黒猫の毛のやはらかさ、
おれの心を溶かす、日本の三味線。
Eau-de-vie de Dantzick.

五月だもの、五月だもの一」

(『明治反自然派文学集1』木下杢太郎 P203)

「酒と煙草にうつとりと、
倦めるところを見まもれば、
それとしもなき霊のいろ
曇りながらに泣きいづる。

なにか嘆かむ、うきうきと、
三味に燥やくわがころ。
なにか嘆かむ、さいへ、また
霊はしくしく泣きいづる。」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』北原白秋 P16)

最初の詩は木下杢太郎の『食後の唄』の中の「金粉酒」(「金粉酒」リキュールに金粉を混ぜたもの)という詩である(「小酒盞」グラス、「彩色玻璃」ステンドグラス、「セル」初

夏に着用する毛織物の一種で肌ざわりがよく、「堅笛」フルート)。

次の詩は北原白秋の『邪宗門』の中の「酒と煙草に」という詩である。どこか寂しげな風景とそこにある酒と煙草の香りの読めるものである。

どちらも詩のタイトルはまさに酒であり、舞台も酒を扱う店舗であることがわかる。

「夕暮のものあかき空、
その空に百舌啼きしきる。
Whisky の罎の列
冷やかに拭く少女、
見よ、あかき夕暮の空、
その空に百舌啼きしきる。」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』北原白秋 P9)

「青白き瓦斯の光に輝きて
吾がベネチクチンの静物画は
忘れられたる如く壁に懸れり

食器棚の鏡にはさまざまの酒の色と
さまざまの客の姿と
さまざまの食器とうつれり

流し来る月琴の調は
幼くしてしかも悲し
かすかに胡弓のひびきさへす

わが顔は熱し、吾が心は冷ゆ
辛き酒を再びわれにすすむる
マドモワゼル、ウメの瞳のふかき」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』高村光太郎 P153)

北原白秋の詩は詩集『邪宗門』の「WHISKY」、高村光太郎のものは『道程』の「食後の酒」である。これらも、詩のタイトルに酒や酒の名前を含む。

また、このふたつの詩は酒が並んでいたり置かれたりしており、どちらもその場の風景の表現に大きく影響している。酒の罎が並ぶ姿は美しく、鏡に映る酒は現実ではないかのようにますます美しい。それがこの場所をより一層美しく見せているように読める。

これらのことから、パンの会のメンバーがかなりの酒好きであったこと、そして酒を文

章に載せることでより耽美的な傾向を強めようとしていたと考えられる。

そして、なんといっても彼ららしいパンの会の会歌が、

「空に眞赤な雲のいろ。
 玻璃に眞赤な酒のいろ。
 なんでこの身が悲しかろ。
 空に眞赤な雲のいろ。」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』北原白秋 P12)

という北原白秋の作った歌で、彼らは会で酒に浸りながらラップ節の曲に合わせて（当時流行していたラップ節を替え歌にしていた）大声で歌っていたという。

消え行く東京を悲しみ、しかしヨーロッパのように、巴里のように変化していく東京を喜ぶ、心の中の葛藤を酒を飲み議論することでさらけだし、一方でそんな思いを深酒することで紛らわしたかったのではないだろうか。

メンバーは、単なる酒好き、ただの泥酔している芸術家とは言い切れないのかもしれない。

3節 カフェー・珈琲

「珈琲の濃きむらさきの一椀を啜りてわれら静ころなし」

（『桐の花／酒ほがひ』吉井勇 P325）

「今しがた

啜つておいた

M o k k a のにほひがまだ何処やらに

残りゐるゆゑうら悲し。

曇つた空に

時時は雨さへけぶる五月の夜の冷こさに

黄いろく にじむ 華電気、

酒宴のあとの雑談のやや狂ほしき情操の一

さりとて別にこれといふゆゑも無けれど

うら懐しく、

何となく古き恋など語らまほしく

寂としてゐるけだるさに

当(あて)もなく見入れば白き食卓の

磁の花瓶にほのぼのと薄紅の牡丹の花。

珈琲、珈琲、若い珈琲」

（『明治反自然派文学集1』木下杢太郎 P204）

当時のカフェーは現在のカフェとは違い、アルコール類も店に置き、女給は単にウエイ
トレスの仕事だけではなく、今でいうホステスとしての役割も持っていた。

パンの会のメンバーもそこに通っていたことから、彼らの作品にはカフェーを舞台にし
たものや珈琲が描かれている作品が見られる。

作家たち自身、実際に女給と恋に落ちることも多かった。それが影響してか、カフェー
での恋の歌や詩、物語が多い。

これらのことから、当時東京で流行し（『巴里の美術学生』岩村透）若き芸術家や作家た
ちが通っていたカフェーはパンの会のメンバーにとってもかなり大きな存在であったこと
がうかがえる。

3節 川

「銀のごと冬に大河は月に照るそをながめつつ酒思ふ我」

「両国の橋のたもとの三階の窓より牧羊神の踊り出づる日」

「いまも汝は広重の絵をながめつつ隅田川をば恋しとおもふや」

(全て『桐の花／酒ほがひ』吉井勇 P326)

(1) 最初の歌の「大河」とは隅田川のこと、歌は、目の前に広がるのは冬の隅田川、空には冬の月、きらきらと銀のように光る川面、それをみているとあとひとつ欲しいのは酒である、という意味のものである。

二つ目の「両国の橋」とは両国橋を指し、「三階の窓」とはレストラン第一やまとの三階部分を指す。「牧羊神」とはパンのことで、パンの会の様子を表した歌である。

三つ目の「汝」とはフリツ・ルンプというドイツの青年美術家で日本へ木版彫刻の研究のために来日していた。彼もパンの会になくはならない定例のひとりで、木下杢太郎がパンの会に連れてきた人物である。

この歌は、ドイツへ帰国するルンプの送別会も兼ねたパンの会で歌われたもので、ルンプが東京（ここでは東京を隅田川や歌川広重の絵と表現）を恋しがっている様子が描かれている。

これら三つはどれも歌もパンの会での作品で、どの歌も川、特に隅田川が描かれている。すべて江戸の名残を持つ川沿いの場所で、そこは彼らにとって異国情調的江戸憧憬があったにちがいない。

(2) 「かるい背廣を身につけて、
今宵もまたゆく都川、
戀か、ねたみか、吊橋の
瓦斯の薄黄が氣にかかる。」

(『明治反自然派文学集1』北原白秋 P144)

この詩は『東京景物詩』の「かるい背廣を」という詩で「都川」はパンの会の開かれていた鳥料理屋のことである。吊橋の表現があることから川沿いでの話であることが伺える。

そしてパンの会に背広を着て出かけていく様子を描いたものだと思われる。パンの会の表現には川の描写が欠かせないものであったことが、ここからも読み取れる。

4節 東京

「嗚呼これ暗き人間の胸より出でて、色相の
巨麗に誇る大伽藍、浅草寺の山門に
大提燈を見る人は我心観る思せむ。
渴と恐怖と飽饜の三次に立てる大虚堂。

時めく衣の紅、浅葱、色さまさまの幻像に
あこがれまよひ渦巻きて、我は君こそ、身をこそと、
刹那も絶えぬ人間の煩惱みては、高塔も
秋の入日の末寒み泫然として涕しぬ。

银杏樹の落葉陽に揺れて寒き地にこそ歸りぬれ、
陰につどへる人の子は日の歡樂の酔さめて
何處にかへる、夕霧に文色もわからず日は暮れぬ。

悔根の華か、夜の灯も涙の夢に沈みては、
あな凄惨の死の都、聽け、かくてこそ造られて
人に後れし大屋の不死に悶躁ける叫喚を。」

(『明治反自然派文学集1』木下杢太郎 P171)

上の詩は『木下杢太郎詩集』の「浅草寺」である。浅草寺にある明るい部分と暗い部分の両方を読んでいるように思える詩で、浅草の陰陽を、読み方を変えればかわりゆく東京の変化をうれし、悲しむようにも読める。

「木の枝に青き小鳥のとまりみてただほればれと鳴ける品川」

(『桐の花／酒ほがひ』北原白秋 P64)

『薄明の時』の句で、この区の文頭には

「鳥よ、鳥よ、宿場の小鳥、
広重の海に飛べよ」

とある。東海道五十三次の第一次宿駅の品川宿。場所は品川宿の遊郭だと言われている。東海道五十三次が代表作である歌川広重は、草花鳥虫を描く花鳥画も描き、「広重の海」とは東京湾を指している。

この句は品川宿の賛歌。「青き小鳥」には若いダンディズムが仮託されている。その「青

き小鳥」も品川の頹廢的（退廢的）な雰囲気に溶け込んでただただうっとりときえざる。そうした江戸情緒から広重的なまた別の世界への脱出を表明している（解説より）。

この作品も前の木下杢太郎「浅草寺」と同じく、かつての江戸の雰囲気を懐かしみ、すっかり変わってしまった品川に馴染んでしまった若者たちに古き東京を思い出して欲しいという悲哀感を表現しているように見える。

「新しき匂なによりいとかなし勸工場のぞく五月のころ」

「人力車の提灯点けて客待つとならぶ河辺に蛍飛びいつ」

（ふたつとも『桐の花／酒ほがひ』北原白秋 P74）

(1) このふたつには「新橋」というタイトルがつけられている。ここで言う新橋とは当時汐留川に架かっていた橋のことで、地域としては新橋を中心とする現在の港区東端一帯を指す。当時は東海道本線の始発駅で、後の汐留貨物駅が当時の新橋駅になる。周辺は工場地帯として発達した。

前の句の「勸工場」とは明治大正時代に多くの商店が規約をつくり、組合制度を設けてひとつの建物の中に種々商品を陳列し、即売したところ。百貨店の出現により次第に取って替わられた。

五月、季節の変わり目の感じ易い心に行きずりに勸工場をのぞいてみると新しい商品の匂いが満ち満ちているのが悲哀を誘う。なにゆえと知れない青春期の感傷である（解説より）。

0 後の句は、客待ちの人力車がそれぞれに提灯を点けて川辺にずらっと並んでおり、その川辺に蛍が飛び交っているという情景だが、前章の「昼の思」に「昔ながらの古い前栽の繁みに飛ぶ蛍よりも客待ちの人力車のかげに仄かに青白いお尻のPATCHを光らす東京の蛍をこの上なく今の心に親しむ。」とあり、その美意識が具現されたのがこの一首といえる。

「うらわかき都びとのみ知ると云ふ銀座通りの朝のかなしみ」

「往き暮れしろまんちつくのわかうどは永代橋の欄干に凭る」

（ふたつとも『桐の花／酒ほがひ』吉井勇 P301・299）

このふたつの吉井勇の句は「わかうど」の中のものである。

前の「銀座通り」とは東京都中央区南西部にある繁華街で、この時から東京、あるいは日本を代表する高級商店街として知られている。

そんな華やかさ、にぎやかさの裏の「かなしみ」に吉井勇の目はしきりに向けられて

いることがわかる（解説より）。

後の句の「ろまんちつく」は非現実的で夢や空想の世界にあこがれ、甘美で感傷的な情緒を好む傾向を指す。

「行き暮れし」とは往く途中で日が暮れた、が原義であるが、ここでは石川啄木のいう<時代の閉塞感>の中で、前途に光明も希望も見出せないまま、無意味な放蕩を繰り返し、刹那的な快樂に生を浪費していたパンの会の青年たちの内面も示していよう（解説より）。

(1) 「雨ふる……あはれ六月の夜の沈鬱、
蒼白く並木の楊、街燈の光に笑ひ、
打湿りたる雰囲気は、
物凄くあやしき夢に悩むごと、
いと青き燐光放つ。

ものにぶく力なき軒燈はマラリヤを病めるごと、
黄色なる環を描き、そが内に打顫けり。
大屋根も敷石も煉瓦の塀も、
狂気の如く一様に黒く輝く。萬物は
陰暗として刻々に腐れ行くさま、
雨ふる……あはれ六月の夜の沈鬱。

(2) 六月の夜の沈鬱、濁りたる
市街の底にたと落つ雨にまじりて、
こびれたる神経の悩に似たる三味の音は、
おぼろげに黄色の幻影を曳く。
雨ふる……あはれ小娘の常磐津の聲……

今ぞわが東京は憂鬱の病に罹り、
熱あるさまに打ふるふ、涙ぐみつつ。」

（『明治反自然派文学集1』長田秀雄 P326）

これは「病める東京」という詩で梅雨である六月の東京の作品であると考えられる。全体的に暗い雰囲気漂う詩で、煉瓦や敷石、芸者という華やかさの中にある東京のやんでいる部分を取り上げている。

どの作家の作品にも、東京は多くとりあげられ、非常に繊細に描かれている。

一方で作品の傾向として見られるのは、かつての東京を懐かしんでいる、メランコリ

ックな描き方がされているということ、そして華やかな東京の影を描こうとしていることがわかる。

このことは、パンの会の若者たちが進化し続ける東京の魅力と、その裏で消えていく東京の切なさ、というふたつの相反するものに翻弄され、自分たちの気持ちの置き場が定まらない様子が表れているのではないだろうか。

(0)

(0)

3章 各作品の分析

1節 『道程』高村光太郎

(1) 高村光太郎とは

- | | |
|--------------|---------------------------------|
| 1883 (明治 16) | 東京・上野に生まれる (本名「みつたろう」) |
| 1896 (明治 29) | 高等小学校卒業後、共立美術館 (本郷) に入り中学の課程を学ぶ |
| 1897 (明治 30) | 東京美術学校予科に入学 |
| 1898 (明治 31) | 東京美術学校本科彫刻科へ進む |
| 1890 (明治 33) | 新詩社へ入社 『明星』に短歌が載る |
| 1902 (明治 35) | 東京美術学校本科彫刻科 (木彫) 卒業 |
| 1905 (明治 38) | 東京美術学校洋画科に再入学 |
| 1906 (明治 39) | アメリカへ渡る |
| 1907 (明治 40) | イギリスへ渡る |
| 1908 (明治 41) | フランスへ渡る |
| 1909 (明治 42) | イタリアへ渡る 帰国後パンの会へ参加 |
| 1910 (明治 43) | 神田淡路町に画廊琅玕洞を開く |
| 1911 (明治 44) | 『青鞥』に表紙絵を描いていた長沼智恵子と出会う |
| 1912 (大正 1) | 岸田劉生らと共にヒウザン会結成 |
| 1913 (大正 2) | パンの会から脱退 ヒウザン会分裂 |
| 1914 (大正 3) | 『道程』出版 智恵子と結婚 |
| 1931 (昭和 6) | 智恵子に精神分裂症の兆候が現れはじめる |
| 1938 (昭和 13) | 智恵子死去 |
| 1941 (昭和 16) | 『智恵子抄』出版 |
| 1945 (昭和 20) | 岩手へ疎開 |
| 1956 (昭和 31) | 中野のアトリエにて死去 |

高村光太郎は口語自由詩の確立者として、萩原朔太郎とともに、日本近代詩史における最も重要な詩人である。

職人氣質の彫刻家・高村光雲の長男として生まれた光太郎は、家業を継ぐべく幼少期から木彫に親しんだ。彫刻の道を継ぐことは本人の意思と反し、生まれたときから自然に決まっていたことだった。10歳を過ぎるころから大学理科を志望したかったほど光学に興味を持つ一方、父は好まなかったが文学にも非常に興味があったという。父親が教授を務める東京美術学校に入学してからも書物を読みふけり、寄席や英語を勉強し、時間がとても

足りない日々を送っていた。そんな中で与謝野鉄幹の詩に感銘を受け、彼の新詩社に入社し、短歌を発表した。

西洋思潮流入の盛んな中、21歳のときにロダンの彫刻を写真で知った光太郎はいち早くその造形力に感動し、熱中するようになる。こうして彼は日本の伝統彫刻、父親の彫刻からの脱却を志向し、彫刻家として進むべき道を西洋芸術の中に見出していく。

ニューヨークからロンドンを経てパリへ渡った光太郎は、真に解放されて生きる人間の姿に強い衝撃を受ける。そして日本の詩人たちの「筆のさきや、才力や、感受性だけで美辞麗句を並べたり、感懐を述べたりしてゐる事のくだらなさを痛感した」(『詩の勉強』)という。

帰国後、東洋と西洋との亀裂に苦悩し、社会や家庭に反感を持ち続けることとなる。パンの会への参加、退廃的な生活、娼妓との恋愛、新しい美術の創造を目指すヒウザン会の結成と分裂…これらは旧来の権威や常識にすぎる父やその周辺、個人の自由な生き方を許さぬ社会への抵抗であった。

不安と焦燥の中、彼は女流作家・長沼智恵子と出会い恋に落ちる。智恵子の愛情は彼を「破れかぶれの退廃気分から遂に引上げ救ひだしてくれ」(『智恵子の半生』)、彼女という個性とぶつかりあうことで、既成の価値に抵抗しようとする彼の苦闘は解放の方向へと向かう。そこから先の彼の作品は彼女の存在なくしては考えられないものとなる。

だからこそ、智恵子を襲った精神の病は彼に衝撃を与えた。そして彼女の死は珠玉の詩集『智恵子抄』を生んだ。

彼女を失った虚脱感の中で、彼は戦争に飲み込まれ、戦争協力詩を多く発表した。しかし彼ほど戦争責任を追及した文学者も少ない。敗戦直後から7年間、岩手県花巻市にこもり、農耕をしながら『暗愚小伝』という戦争中の自らの行動に対し、自分の生涯を反省して作った自伝的な詩を発表し、新たな芸術創出を願いつつ、73歳でこの世を去った。

(2) 『道程』

明治43年から大正3年にかけての詩をまとめたもの。

「詩人・北原白秋とくらべると、高村光太郎は現代詩人として、比較にならないほど複雑な意味や屈折を抱懐した人である。

白秋の詩的生涯には、ほとんど挫折というものが見られない。もちろん幾多の挫折はあったであろうが、その詩人としての生涯を揺るがすほどのものは何一つとして経験はしなかった。しかし光太郎においては、この挫折の連続が、彼の生涯であったとさえ言える。

(中略)

しかし、光太郎においては、芸術的自律性と倫理的自律性という、きわめて一元化するに困難な二つの要素をもち、死ぬまでその調和とバランスに苦しみ、その絡み合いにおいて、どちらが傷ついても芸術家光太郎に重大な傷痕をのこした。

(中略)

白秋においては感官か個人的感情を刺激すれば、いつでもそこから詩は生まれだが、光太郎においては、外部の条件が彼の倫理性を刺激しなければ、どんな詩も生まれることがない。つまり、彼の内部の倫理的人間が危機におちいらなければ、彼のほとんどすべての詩において、そうした倫理性の危機が、彼の詩のモチーフになっているのを見れば、この間の事情はよくわかるのである。」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』村野四郎 P486)

芸術派の詩人・白秋と、人道派の詩人・光太郎は、その時代背景も社会環境もほとんど同じである。光太郎は白秋の詩を読んで、自ら詩を書き出したため、創作活動に遅れはあるものの、文学的出発はほぼ同時期だったといえるだろう。

だから『道程』の詩の多くは、ヒューマニストとしての苦悶と、パンの会のような耽美的という新しい意識の中から生まれた作品である。

「僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
ああ、自然よ
父よ
僕を一人立ちにさせた広大な父よ
僕から目を離さないで守る事をせよ
常に父の気魄を僕に充たせよ
この遠い道程のため
この遠い道程のため」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』高村光太郎 P204)

『道程』の「道程」、この有名な詩は光太郎の生き方や態度をはっきり示す作品である。自分の前には道はないが、道のない道を自分はきりひらいてゆく。自分の正しい意志によってひらかれた道こそ自分の道であって、それは自分の後ろにのこるだろう。このような人間的決意を、祈りにも似た気持ちで光太郎自身によびかけている。光太郎にとっては到達点よりもいつもその道程が問題だった。光太郎の生涯は矛盾に充ちた人間形成の道程だった。それを処女詩集の題名にしたのだ。

「モナ・リザは歩み去れり
かの不思議なる微笑に銀の如き顫音を加へて
「よき人になれかし」と
とほく、はかなく、かなしげに
また、凱旋の將軍の夫人が偷視（ぬすみみ）の如き
冷かにしてあたたかなる
銀の如き顫音を加へて
しづやかに、つつましやかに
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
深く被はれたる煤色の仮漆（エルニ）こそ
はれやかに解かれたれ
ながく画堂の壁に閉ぢられたる
額ぶちこそは除かれたれ
敬虔の涙をたたへて
画布にむかひたる
迷ひふかき裏切者の画家こそはかなしけれ
ああ、画家こそははかなけれ
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
心弱く、痛ましけれど
手に権謀の力つよき
昼みれば淡緑に
夜みれば真紅なる
かのアレキサンドルの青玉の如き
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
我が魂を脅し
我が生の燃焼に油をそそぎし
モナ・リザの唇はなほ微笑せり
ねたましきかな
モナ・リザは涙をながさず
ただ東洋の真珠の如き
うるみある淡碧の歯をみせて微笑せり
額ぶちを離れたる
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
かつてその不可思議に心をののき
逃亡を企てし我なれど
ああ、あやしきかな
歩み去るその後かげの慕はしさよ
幻の如く、また阿片を燻く烟の如く
消えなば、いかに悲しからむ
ああ、記念すべき霜月の末の日よ
モナ・リザは歩み去れり。」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』高村光太郎 P149)

この「失はれたるモナ・リザ」は吉原の若太夫の詩である。

パンの会の流れから、吉原へ行った晩、そこで光太郎曰く「懐古的情趣」のある元禄髷をした妓に一目惚れをする。その時はスケッチだけして帰ったのだが、その面影が忘れられずに、もう一枚絵を描こうと真昼に出かけ、それ以来足しげくその若太夫のもとへ通うようになる。

そんな彼女がいなくなってしまったときにその悲しさを讀んだ詩である。「モナ・リザ」という有名な絵の古典的な美しさを否定することで悲しさを歌っているように見える、幸太郎らしい詩である。

「青白き瓦斯の光に輝きて
吾がベネチクチンの静物画は
忘れられたる如く壁に懸れり

食器棚の鏡にはさまざまの酒の色と

さまさまの客の姿と
さまさまの食器とうつれり

流し来る月琴の調は
幼くしてしかも悲し
かすかに胡弓のひびきさへす

わが顔は熱し、吾が心は冷ゆ
辛き酒を再びわれにすすむる
マドモワゼル、ウメの瞳のふかさ」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』高村光太郎 P153)

という前の章でも出た詩は、パンの会が開かれていた雷門のよか楼の「お梅さん」という女給の詩で、一日に五回もここに通うほど彼女に熱心という。彼女が他の客のところへ長く行っていたりすると、「ヤケを起こして麦酒壇をたたきつけたり、卓子ごと二階の窓から往来へおっぼりだした」(『ビウザン会とパンの会』高村光太郎)というほど入れ込んでいたようだ。

このふたつの作品から読み取れるように、高村光太郎は当時のカフェーや料理屋の姿を直接的ではなく、女給という人間を通して描いている。それは彼の人道派という作風からもわかる。

当時の彼、そして東京にはカフェーなどの人が集う場、議論する場、そしてそこにいる女給の存在が不可欠であったことがうかがえる。

「あの大丸も店仕舞をしたさうな
角の尾張屋の
大きなおろし小うり甘酒の行燈が
いま百八つの鐘の鳴り止んで
少しひつそりした
人形町にまだ見える

おもひなしか掃除の出来た
電車通りを帰つて来れば
横町に古風な白張提灯がひよつこりと一

何処かで鶏が啼く」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』高村光太郎 P151)

「止せ、止せ

みじんこ生活の都会が何だ

(中略)

都会の路傍に堆く積んであるのを見ろ

(中略)

汝を生んだのは都会だ

都会が離れられると思ふか

人間は人間の為した事を尊重しろ」

(『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』高村光太郎 P155)

前の詩は「人形町」、後のものは「声」という詩である。このふたつからわかるように、光太郎は東京を否定的に見ていることがわかる。にぎやかなはずの人形町、にぎやかなはずの東京、それをあえて悲しく書いている。

それは彼がヨーロッパから帰ってきてからの東京に対するあきらめが表れてるように見える。そして、そのあきらめ変わらぬ古い体質の父親、そして日本に対するあきらめのようにも見える。

また、「道程」にも永代橋、吾妻橋、両国橋が詩の中に出ている。このことから彼にとってもパンの会、そして川はとても重要なものであったことがわかる。

2節 『東京景物詩』北原白秋

(1) 北原白秋とは

- 1885 (明治 18) 福岡県沖端村 (現在の柳川) に生まれる
- 1895 (明治 28) 尋常小学校を首席で卒業 柳河高等小学校に入学
- 1897 (明治 30) 高等小学校2年を修了後、2級飛躍して中学へ入学
- 1904 (明治 37) 中学を中退 早稲田大学英文科予科に入学
若山牧水と牛込で同居する
- 1906 (明治 39) 新詩社に参加 『明星』に作品が掲載される
- 1907 (明治 40) 千駄ヶ谷に住む
- 1908 (明治 41) パンの会を開く 神楽町に住む
- 1909 (明治 42) 処女詩集『邪宗門』を出版 『屋上庭園』出版 実家が破産
- 1910 (明治 43) 青山原宿に住む
- 1912 (明治 45・大正元年) 市ヶ谷未決監に拘留される
- 1913 (大正 2) 福島俊子と結婚
- 1914 (大正 3) 離婚 麻布十番に住む
- 1916 (大正 5) 江口章子と結婚
- 1920 (大正 9) 離婚
- 1921 (大正 10) 佐藤菊子と結婚
- 1937 (昭和 12) 糖尿病・腎臓病により眼底出血をきたし入院
- 1940 (昭和 15) 阿佐ヶ谷に住む
- 1942 (昭和 17) 死去

北原白秋 (本名隆吉) は異国情趣の漂う水郷柳川の旧家 (酒造家) に生まれる。この風土と環境が後の文学形成に大きな影響を与えたといわれている。

中学時代に島崎藤村の『若菜集』や雑誌『文庫』の詩風に親しみ、叔父が東京から送ってくる新刊詩歌書 (『明星』など) に啓発され、新派和歌に刺激されて作歌を始め、『文庫』に短歌を掲載し、河合醉茗に詩才を認められる。

そして、中学を中退し早稲田大学に入学、友人の中林蘇水・牧水と共に「早稲田の三水」 (当時、白秋は射水のいう名を使っていた) と称されるようになる。その頃、早稲田学報の懸賞で一等入選した『全都覚醒賦』が大々的に『文庫』に転載され、突如、新進詩人として詩壇に姿を現した。ただ、そこにはまだ官能詩人としての姿は見られない。

白秋が官能的、叙情的な詩を書き出したのは、大学を中退し、与謝野鉄幹のすすめによって新詩社に参加しだしてからで、『明星』の新人の筆頭となる。

そんな中、耽美的芸術観を一変させるような事件が起こる。人妻との恋愛の果て、その

夫に姦通罪に問われ拘留されてしまう。それにより、人気詩人であった白秋の名声は地に落ち、失意と苦悩のどん底に落とされる。

しかし、この散々な経験が、彼の作品に変化をもたらした。夢見るロマンチックな歌や詩は、落ち着いた自然観や苦い自意識の歌へと変わり、かつて見られなかった詩精神の垂直的で求心的な深化の方向がみられるようになる。このことは天才詩人にとって非常に重要なこととなった。

昭和に入ると、糖尿病、腎臓病によって視力は次第に衰え始め、やがて失明してしまう。そして大戦の混乱によって暗い時期をむかえる。これに耐えながら白秋は歌一筋に生き、「死ぬまで水々しい芸術的創造力を減衰させなかった芸術家」（『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』村野四郎 P486）であった。

(2) 『東京景物詩』



写真 3-2-2-1 木下杢太郎画「東京夜曲」扉 (HP『早稲田と文学』)

「わかき日の饗宴を忍びてこの怪しき紺と青との詩集を
“PAN” とわが『屋上庭園』の友にささぐ」

(『明治反自然派文学集1』北原白秋 P113)

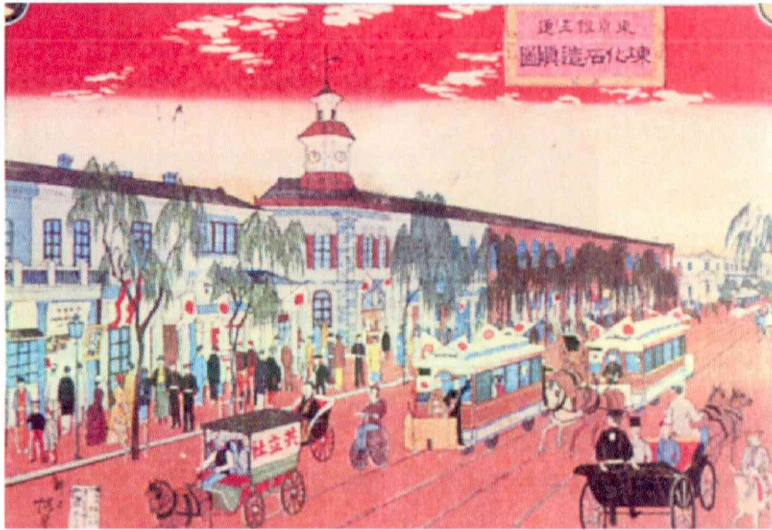
この白秋の言葉で始まる詩集(写真3-2-2-1)は、ここにある通りパンの会記念誌集である。東京について書いた詩で、東京の季節感を读んでいるように思える詩集である。「『思ひ出』に於いて既にその『印象派風の感覚表現』を詩壇に認められたが、印象派の美術的要素とそれに伴った江戸情調とを官能的詩感覚にまで高めたのはこの詩集」(『明治反自然派文学集1』「解題」野田宇太郎 P341)というだけあって、官能的な詩が多い。

詩の中に「官能」という単語が使われていることもあり、「公園の薄暮」「鶯の歌」「夜の官能」「東京物理学校」(現在の東京理科大のこと)「骨なし兒と黒猫」「雪ふる夜のころもち」「おかる勘平」といった、『東京景物詩』集の中でも、早い時期に書かれた作品に多く使っている。



絵 3-2-2-2 栄斎重清『東京銀座通電氣費建設』(『明治時代館』P13)

「公園の薄暮」「鶯の歌」「露臺」「雑草園」「瞰望」「IIS 組合の知痴」「IV 銀色の背景」「雪ふる夜のころもち」「銀座花壇」「雪の日」「道化もの」「かるい背廣を」「薄あかり」「心中」「銀座の雨」の詩には「瓦斯」(＝ガス灯)の姿が書かれており、当時の東京(絵 3-2-2)はガス灯からアーク灯に街の明かりが代わっていたため、あえてガス灯を書くことで失われつつある東京を懐かしんでいたのかもしれない。



絵 3-2-2-3 馬車の通る様子 (『明治時代館』P87)

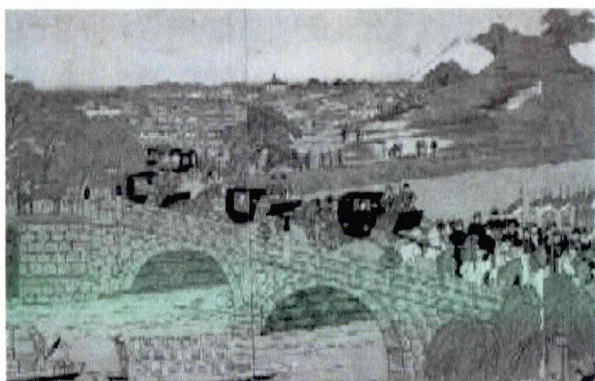
「馬車」(絵 3-2-2-3)の書かれているものも多く、「露臺」「III 泣きごゑ」「V 神経の凝視」「雪ふる夜のころもち」「新聞紙」「隣人」「槍持」「CHONKINA.」「道化もの」がそうで、これもガス灯と同じく、かつての東京を懐かしみ、今を悲しんでいる。

また、他の作家の作品よりも汽車が書かれているしが多いのも白秋の詩の特徴なのではないだろうか。「夜の官能」「雑草園」「瞰望」「東京物理学校」「銀座花壇」「柳の佐和利」「汽車はゆくゆく」がそうである。それは、鉄道がどんどん普及していたとはいえ、柳川出身の彼にとってまだまだ鉄道は珍しいものであり、ガス灯や馬車の記述に反して東京の近代化を喜ぶ感情の表れのようにも見える。

深酒がたたって体を壊し失明してしまう、パンの会のメンバーの中でも相当な酒好きであった白秋らしく、酒の記述も多い。「夜の官能」「IIS 組合の知痴」「骨なし兒と黒猫」「雪ふる夜のころもち」「青い髯」「隣人」「雨の気まぐれ」「歌うたひ」「槍持」「夜ふる雪」「もしやさうでは」「銀座の雨」「冬の夜の物語」「薄荷酒」「銀座の雨」(前の「銀座の雨」とは別の詩)に書かれている。「酒」とだけ書かれているものはあっても、日本酒のものではなく、酒の種類で書かれているのは赤ワインや白ワイン、ビール、ウイスキー、薄荷酒(明治時代に生まれた)であることから、当時の西洋化がうかがえる。

そして、柳川出身の彼らしく、水辺の詩がとても多い。「公園の薄暮」「鶯の歌」「夜の官

能」「片恋」「I窓のそと」「IIS組合の知痴」「槍持」「かるい背廣を」「青い髯」「忠弥」「CHONKINA.」「蝮捕り」「薄あかり」「雨あがり」「心中」「花火」「雪」「キャベツ畑の雨」「汽車はゆくゆく」「河岸の雨」「春の鳥」に川などの水辺の表現があり、そのうち「I窓のそと」「IIS組合の知痴」「槍持」「かるい背廣を」「雨あがり」「心中」「花火」「雪」「キャベツ畑の雨」「河岸の雨」には橋という表現がある。「I窓のそと」は眼鏡橋、つまり万世橋（万代橋）（絵 3-2-2-1）で、「花火」は両国橋（写真 3-2-2-2）、「槍持」は日本橋（写真 3-2-2-3）と書かれている。



絵 3-2-2-1 明治初期の万世橋（HP『万世橋』）

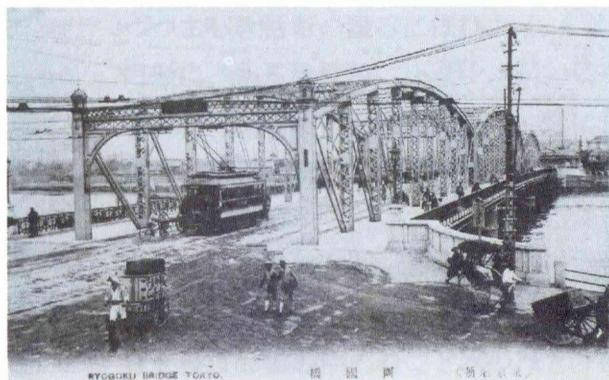


写真 3-2-2-2 明治 37 年の両国橋（HP『Wikipedia』）

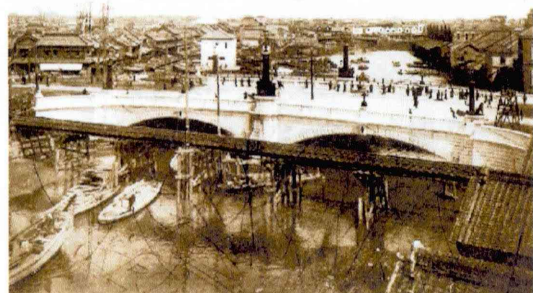


写真 3-2-2-3 明治 44 年の日本橋（HP『中央区観光協会』）

もうひとつ、この詩集の特徴として挙げられるのが、色彩の表現が度々出てくることである。

銀、金、赤、青、黄、白が主に使われている色で、「公園の薄暮」「鶯の歌」「夜の官能」「片恋」「露臺」「雑草園」「瞰望」「I窓の外」「II S 組合の知痴」「IV銀色の背景」「V神経の凝視」「東京物理学校」「骨なし児と黒猫」「雪ふる夜のこころもち」「解雪」「青い髯」「五月」「銀座花壇」「新聞紙」「畜生」「隣人」「雨の気まぐれ」「葱の畑」「八月のあひびき」「秋」「おかる勘平」「雪の日」「種蒔き」「歌うたひ」「CHONKINA.」「鬼百合」「道化もの」「蝮捕り」「柳の左和利」「春の鳥」「かるい背廣を」「薄あかり」「金と青との」「雨あがり」「心中」「花火」「紫陽花」「彼岸花」「もしやさうでは」「片足」「銀座の雨」「雪」「冬の夜の物語」「キャベツ畑の雨」「蕨」「涙」「新生」「黄色い春」「汽車はゆくゆく」「河岸の雨」「そなた待つ間」「薄荷酒」「白い月」と、58の詩に見られる。これは詩集の役6分の5を占め、白秋は東京を表現する上で色彩を取り入れることをとても重要視していたと考えられる。

「ほの青き銀色の空気に、
そことなく噴水の水はしたたり、
薄明ややしばしさまかえぬほど、
ふくらなる羽毛頸巻のいろなやましく女ゆきかふ。

つつましき枯草の湿るにほひよ……
円形に、あるは楕円に、
画られし園の配置の黄にほめき、霧に三つ四つ
色淡き紫の弧燈したしげに光うるほふ。

春はなほ見えねども、園のところに
刺すがごと沁みきたり、瓦斯の薄黄は
身を投げし霊のゆめのごと水のほとりに。」

(『明治反自然派文学集1』北原白秋 P113)

これは『東京景物詩』の「東京夜曲」の中の「公園の薄暮」という詩である。単に、ガス灯の色を「薄黄」と表現しただけではなく、「ほの青き銀色」と空気の色までも白秋は表現している。彼は今まで、東京が近代化され、物が溢れ、実際の街の雰囲気や街を歩く人々の雰囲気も華やかになっていく様子を色彩を多用することで表現したのではないだろうか。

「金と青との愁夜曲、
春と夏との二声楽、
わかい東京に江戸の唄、

陰影と光のわがころ。」

(『明治反自然派文学集1』北原白秋 P144)

上の詩は「金と青との」という詩である。白秋は江戸と東京の入り混じった当時を、金と青、光と影をこんな風に見ていたのだろう。

0

0

4章 時代ごとの比較

永井荷風『すみだ川』『つゆのあとさき』

1節 永井荷風とは



永井荷風 (HP『Letter from Yochomachi(Google)』)

- 1879 (明治 12) 東京小石川に生まれる (本名は壮吉)
- 1884 (明治 17) 東京女子師範学校附属幼稚園に通う
- 1889 (明治 22) 黒田小学校尋常科卒業
東京府尋常師範学校附属小学校高等科へ入学
- 1891 (明治 24) 神田の高等師範学校附属学校尋常中学校へ転入
- 1897 (明治 30) 第一高等学校不合格 2ヶ月上海で生活
東京外語学校(現在の東京外語大学)清語科へ入学
- 1898 (明治 31) 広津柳浪の門下生となる
- 1899 (明治 32) 落語家の弟子となる
- 1900 (明治 33) 歌舞伎劇作家の門下生となる
- 1903 (明治 36) アメリカへ渡る
- 1905 (明治 38) 横浜正金銀行へ勤める (ニューヨーク支店)
- 1907 (明治 40) フランスへ渡る
- 1908 (明治 41) 帰国 『あめりか物語』発表
- 1909 (明治 42) 『ふらんす物語』『すみだ川』発表
- 1910 (明治 43) 慶應義塾大学分科の教授に就任 『三田文学』創刊
- 1912 (明治 45) ヨネと結婚 (翌年離婚)
- 1914 (大正 3) 八重次と結婚 (翌年離婚)
- 1931 (昭和 6) 『つゆのあとさき』発表

1952（昭和 27） 文化勲章受賞

1959（昭和 34） 胃潰瘍で死去

永井荷風は宮城県権知事、東京学士院会員、司法権大書記官を歴任した祖父を持ち、父もエリート文部官僚という厳格な家に生まれた。

しかし、荷風は江戸文化に興味を持ち、落語家に弟子入りしたり、歌舞伎役者になろうとしたり、自由奔放な生活を送る。勉学には身を入れず、東京外語学校は除籍となった。

荷風が文学に深入りすることを懸念した父は、実業家の道を歩ませようと渡米させるが父の意に反して文学に傾倒、そのまま銀行を辞め、フランスへ渡る。

フランスで市民の個人主義と自由を愛する精神を学び、パリ滞在中に上田敏と出会い、帰国後は森鷗外らとも親交を深めた。

『あめりか物語』『ふらんす物語』で異国での思いを書いたが、それは同時に西洋と日本の落差を表すものだった。文明の落差という現実をみた荷風は古きよきものを見出そうとし、『すみだ川』を執筆する。

そして二度の離婚を経て、散策の対象は銀座や新橋から下町の深川、本所や荒川、中川、新開地の砂町、大島に移っていく。その中でも浅草へは頻繁に通い、ストリップ劇場（写真 4-1-1）やレストラン「アリゾナ」によく行っていたという。



写真 4-1-1 浅草ロック座での荷風（HP『毎日.jp 昭和毎日』）

荷風は自然主義作家として出発したが後に反自然主義へと変化し、耽美派で享樂的な作品を多く残している。題材を花柳界にしているものが多いのも特徴である。

『あめりか物語』『ふらんす物語』を発表したところから、『屋上庭園』への掲載が決まり、パンの会へ参加することにもなっている。パリで出会った上田敏の影響も大きいだろう。同じくパンの会のメンバーであった谷崎潤一郎との関係は深く、戦時中も関西の彼を訪ねるほどであった。

東京を散策し、細かく描写していることも特徴のひとつで、幼い頃から育った東京への愛着や、変化していく悲しさが読み取れる。

2節 『すみだ川』

この物語は1909（明治42）年に発表された物語である。舞台は明治35～36年のまだ永井荷風が渡米する前の東京を舞台にしている。

「新橋上野浅草の間を往復していた鉄道馬車が其儘電車に変つたところである。わたくしは丁度その頃に東京を去り六年ぶりに帰つてきた。東京市中の街路は到る處舊観を失つてゐた。以前木造であつた永代と両国との二橋は鉄のつり橋にかえられたのみならず橋の位置も変りまたその兩岸の街路も著しく変つてゐた。明治四十一二年ころ隅田川に架せられた橋梁の中でむかしのままに木づくりの姿をとどめたものは新大橋と千住の大橋ばかりであつた。わたくしは洋行以前二十四五歳の頃に見歩いた東京の町々とその時代の生活とを言知れずなつかしく思返して、この心持を表すために一篇の小説をつくらうと思立つた。」

（『すみだ川』 P6）

と、昭和10年に入ってから荷風は、はしがきで語っている。

物語は隅田川の兩岸を舞台に18歳の長吉を中心にすすめられていく。長吉は小学校を卒業し、大学に進学させたいという母親・お豊の思いから高等学校を目指して日々、中学校に通っている学生である。長期休みには本郷の夜学にも通っている。

もともと長吉の父親が商売で失敗して、そのまま亡くなり、困って常磐津の師匠をして生計を立てている経験から、お豊は長吉を勤めに出る月給とりにしたかった。

しかし、長吉は色が白くて大人しく、気も弱く、学問にも向いていなかった。体を動かすことも大の苦手で、体操の授業がうまくこなせず、同級生からはいじめられるという不安もあり、宿題もやらずに、お豊にだまって学校を欠席してばかりいた。母親の意に反して彼は高等学校へ進学しようとする気がまったくなかったのだ。（そうしているうちに長吉は落第してしまう。）

長吉にはお糸という想いを寄せる幼馴染がいた。彼女はせんべい屋の娘で年は16歳、長吉からするとふたつも年下であったが、彼より明るくはつらつとしており、年上のようなしっかり者だった。そんなお糸は母親が世話になった人との関係で何年前前から、将来は葎町で芸者になることが決まっていた。

当然、お豊は芸者と息子の関係を快く思っていなかった。長吉はその関係や自分の考えを理解してくれるのは俳諧詩である伯父の蘿月だけだった。

長吉は自分の先の見えない人生と、どうすることもできないお糸の将来を悩み続ける。悩み続ける中で、舞台を見たことがきっかけで彼は学校へ行かず、役者を志そうとする。

しかし、これを理解者だと思っていた蘿月にまでとめられ、しかもお糸との関係もうまくいかず、大雨で増水した川を歩き回り、チフスに感染してしまう。自殺する勇気がなか

った彼は病気になって死のうとしたのだ。物語はそこで終わっている。

この物語は、長吉を古い時代の東京、お糸を新しい時代の東京として書かれているように読める。

「お糸である。お糸は立派なセルの吾妻コオトの紐を解きとき上つて来た。

(中略)

『いやにふけちまつたでせう。皆さう云つてよ。』とお糸は美しく微笑んで紫縮緬の羽織の紐の解けかかつたのを結び直すついでに帯の間から緋天鷲絨の煙草入を出して、『をばさん。わたし、もう煙草喫むやうになつたのよ。生意気でせう。』今度は高く笑った。」

(『すみだ川』 P34)

「長く葎町の人たるべく荷物を取りに帰つて来たが、其の時長吉はまるで別の人のやうにお糸の姿の変つてしまつたのに驚いた。赤いメレンスの帯ばかり締めて居た娘姿が、突然たつた一日の間に、丁度今御手洗で手を洗つてゐる若い芸者その儘の姿になつてしまつたのだ。薬指にはもう指環さへ穿めてゐた。用もないのに幾度となく帯の間から鏡入れや紙入れを抜き出して、白粉をつけ直したり鬢のほつれを撫で上げたりする。戸外には車を待たして置いていかにも急しい大切な用件を身に帯びてゐると云つた風で一時間もたつたない中に帰つてしまつた。

(中略)

また何時出るのか分からないから又近い中に遊びに来るわと云ふ懐しい声も聞れないのではなかつたが、其れはもう今までのあどけない約束ではなくて、世馴れた人の如才ない挨拶としか長吉には聞取れなかつた。娘であつたお糸、幼馴染の恋人のお糸はこの世にはもう生きてゐないのだ。路傍に寝て居る犬を驚して勢よく駆け去つた車の後に、えも云はれず立迷つた化粧の匂ひが、いかに苦しく、いかに切なく身中にしみ渡つたであらう……。」

(『すみだ川』 P6)

このように、お糸は物語の中でどんどん変化していく。そしてお糸を取り巻く環境を長吉は切なく思っている。

「いよいよ御神燈のつづいた葎町の路地口へ来た時、長吉はもう此れ以上果敢いとか悲しいと思ふ元気さへなくなつて、唯ぼんやり、狭く暗い路地裏のいやに奥深く行先知れず曲込んでゐるのを不思議さうに覗込むばかりであつた。

『あの、一イニイ三イ……四つ目の瓦斯燈の出るところだよ。松葉屋と書いてあるだらう。ね。あの家よ。』とお糸は(続く)」

同じ葎町の路地が長吉には薄暗しか見えていないのにも関わらず、お糸にはガス灯の明かりが見えている。

「自分の眼にばかりありあり見えるお糸の後姿を追って行くのである。学校のことも何も彼も忘れて、駒形から蔵前、蔵前から浅草橋……其れから葎町の方へどんどん歩いた。然し電車の通つてゐる馬喰町の大通りまで来て、長吉は何の横町を曲がればよかつたのか少し当惑した。けれども大体の方角はよく分つてゐる。東京に生まれたものだけに道をきくのが厭である。恋人の住む町と思へば、其の名を徒に路傍の他人に漏すのが、心の秘密を探られるやうで、唯わけもなく恐しくてならない。長吉は仕方なしに唯だ左へ左へと、いいかげんに折れて行くと蔵造りの間屋らしい商家のつづいた同じたうな掘割の岸に二度も出た。其の結果長吉は遙か向うに明治座の屋根を見てやがてやや廣い往へ出た時、其の遠い道のはづれに河蒸汽船の汽笛の音の聞えるのに、初めて自分の位置と町の方角を覚つた。同時に非常な疲労を感じた。制帽を冠つた額のみならず汗は袴をはいた帯のまはりまでしみ出してゐた。然しもう一瞬間とても休む気にはならない。長吉は月の夜に連れられて来た路地口をば、これは又一層の苦心、一層の懸念、一層の疲労を以つて、やつとの事で見出し得たのである。」

明治座は日本橋久松町である。お糸ではない芸者をお糸に重ね、その後をついて葎町へ向かう。長吉には葎町までの道のりは東京でありながら、もはや身近な場所ではなく、重苦しいものとなっている。迷つたり、恐ろしくなつたりしているのはお糸がどんどん成長し、離れていくことに対する不安なのかもしれない。

疲れている長吉が休むことなく歩き続けたのは、一刻も早くこの場(=変わってしまったお糸)から離れたかつたからではないだろうか。

しかし、長吉から見た隅田川には

「長吉は先刻から一人ぼんやりして、或時は今戸橋*の欄干に凭れたり、或時は岸の石垣から渡場の棧橋へ下りて見たりして、夕日から黄昏、黄昏から夜になる河の景色を眺めて居た。

(中略)

一しきり渡場へ急ぐ人の往来も今では殆ど絶え、橋の下に夜泊りする荷船の燈火が慶養寺の高い木立を倒さに映した山谷堀の水に美しく流れた。門口に柳のある新しい二階家からは三味線が聞えて、水に添ふ低い小家の格子戸の外には裸体の亭主が

涼みに出始めた。

(中略)

空は鏡のやうに明いのでそれを遮る堤と木立はますます黒く、星は宵の明星の唯一つ見えるばかりで其の他はことごとく余りに明い空の光に掻き消され、横ざまに長く棚曳く雲のちぎれが銀色に透通つて輝いてゐる。見るみる中満月が木立を離れるに従ひ河岸の夜露をあびた瓦屋根や水に湿れた棒杭、満潮に流れ寄る石垣下の藻草のちぎれ、船の横腹、竹竿などが、逸早く月の光を受けて蒼く輝き出した。忽ち長吉は自分の影が橋板の上に段々に濃く描き出されるのを知つた。」

*今戸橋 (絵 4-2-1・写真 4-2-2・写真 4-2-3)

(『すみだ川』 P17)

このように、光りと明さ、輝き見えている。自分の居場所としてふさわしく感じているの
だろう。

この長吉の見るふたつの風景が長吉の心情はもちろん、変わっていく東京と変わらない
東京を表しているのではないだろうか。



絵 4-2-1 歌川広重の描いた今戸橋 (HP『今戸橋』)

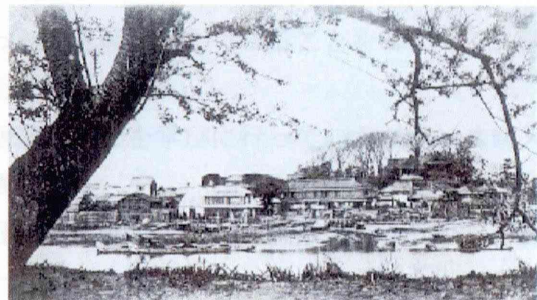
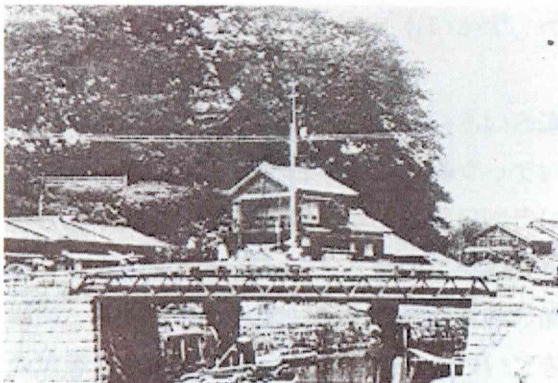


写真 4-2-2・4-2-3 明治末の今戸橋 (HP『今戸橋』)

3節 『つゆのあとさき』

物語は君江が日比谷の売卜者のところへ彼女の身边に起こっていた二、三の薄気味の悪い出来事を気にして見てもらいに行くところから始まる。

君江は、17歳の時に親や親類縁者が押しつける縁談を避けて、芸者になっていた京子を頼って埼玉から上京する。

一人で住むようになった頃、君江は上野池ノ端のカフェー・サロンラックで女給生活を始め、銀座のカフェー・ドンファンドンファンの女給として通いながら、市ケ谷本村町に貸間住いをしていた。

君江にはパトロンとなっている、新進小説家清岡進がいる。清岡は、美しい妻・鶴子との間がうまくいっておらず、清岡は、君江がサロンラックで女給になった当日に、君江を四谷荒木町の待合に連れていった。清岡の方は一時妾にしていた映画女優を他の男に奪われて別の女を物色していた矢先であり、身も心も捧げ尽したような濃厚な姿態を見せる君江にすっかり迷い込み、ほどなく君江をサロンラックからやめさせ、当時銀座屈指のカフェー・ドンファンドンファンに斡旋したのである。ところがある日、病気で休んだという君江を見舞いに行こうとしている道で、清岡は君江が元気な姿で歩いているのを目にする。不審に思ってこっそり後をつけてみると、市ケ谷の八幡神社の境内のベンチで、何と君江は老人と密会していた。この松崎という老人は、女給になる前からの君江の馴染みで、京子と三人で遊んだこともあり、その日も、夜更けの風と濠端のさびしさを好いことに戯れながら連れ立って、芸者をしている京子を訪ね、一つ待合へ三人で泊まっていた。その恨みで君江の身边で不気味な出来事が起きるように仕組んだのである。

そして、世田谷豪徳寺、清岡進の父熙のもとには清岡の妻・鶴子が清岡の戸籍にきちんと入ることを勧められていた。

鶴子は、前の夫が西洋に留学中に清岡と恋に落ち、そのことを知った夫の実家から離別され、自分の実家からも、一定の資産を与えられた上で出入りを禁じられる。清岡は文壇の流行児となり売文の富を得ると、女遊びにうつつをぬかすようになり、知りあつたころの真率なところもすっかり失せてしまい、絶望した鶴子は家を去る決心をしたものの、女の方から別れ話を持ちだすわけにもいかず、つい言いだしそびれるままに、今に至っているのであった。

やがて清岡はある待合に、女給がいろいろ違った男を連れこんでいることを耳にする。清岡はその女給は君江ではないかと勘ぐっていた。

再び話は鶴子に戻る。鶴子は、女学校時代に語学と礼法を学びに行っていたフランス婦人が日本人の助手を探しており鶴子にその役を依頼する。

後に、鶴子の渡仏、そしてその後の清岡の酒浸りと放蕩のすさんだ生活ぶりを知り、自分の放恣な生活もどうやら終わりに近づいてきたという感慨を持つ。

そうすると、自分の生活の舞台となってきた牛込から小石川にかけての眺望が、急に何と

いうわけもなく懐かしくなり、記憶に留めようとしんみり眺めていた直後、出獄して間もない京子の元の旦那・川島と出会い、君江は自分の部屋に呼びもてなす。その翌日、君江は手紙を見つける。それは、川島が死に場所を見つけようと歩いている途中で君江に会ったこと、自分に示してくれた親切に感謝し、君江の幸せを祈りながら別れを告げる手紙であった。（以上あらすじ『永井荷風 つゆのあとさき について』の一部簡略）

この物語に出てくるカフェー・ドンファンは当時荷風が通っていたカフェー・タイガーのことだと言われている。タイガーは当時銀座にあったカフェーの中でも美人を多く雇い、色っぽい接客をさせることで有名であった。君江はタイガーの女給をモデルにしているのだろう。時代は震災後という記述があるので昭和初期の話であることがわかる。

話の中で荷風は昭和の銀座や日比谷を

「建物を出ると、おもては五月はじめの晴れ渡つた日かげに、日比谷公園から堀端一帯の青葉が一層色あざやかに輝き、電車を待つ人だまりの中から流行の衣裳の翻へるのが目に立つて見える。腕時計に時間を見ながら、君江はガードの下を通り抜けて、数寄屋橋のたもとへ来かかると、朝日新聞社を始め、をちこちの高い屋根の上から広告の軽気球があがつてゐる」

（『つゆのあとさき』 P15）

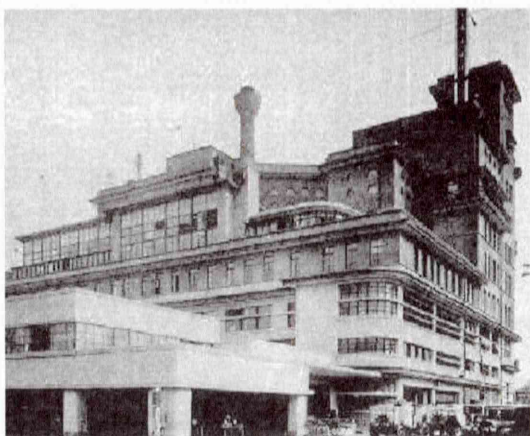


写真4-3-1・4-3-2 当時の朝日新聞社社屋（HP『分離派建築博物館』）

「松屋呉服店から二三軒京橋の方へ寄つたところに、表附は四間間口の中央に弧ゆみ形なりの広い出入口を設け、その周囲に DONJUAN といふ西洋文字を裸體の女が相寄つて捧げてゐる漆喰細工。夜になると、此の字に赤い電気がつく
（中略）

路地は人ひとりやつと通れる程狭いのに、大きな芥箱が並んでゐて、寒中でも青蝇が翼はねを鳴し、晝中でも鼯のやうな老鼠が出没して、人が来ると長い尾の先で水溜の水をはね飛ばす。君江は袂をおさへ抜足して十歩ばかり。やがて裏通り

を行く人の顔も見分けられるあたり。安油の悪臭が襲ふやうに湧き出してくる出入口をくぐると、何処といふ事なく蟲のぞろぞろ這ひ廻つてゐる料理場である。料理場は後から建て増したものらしく、銀座通に面した表附とはちがつて、震災当時の小屋同然、屋根も壁もトタンの海鼠板一枚で囲つてあるばかり。それでも土間から急な梯子段を土足のまゝ登つて行くと、十畳ばかり畳を敷いた一室があつて、四方の壁ぐるりと十四五臺ばかりも鏡臺が並べてある。丁度三時五六分前。十畳の一室は、朝十時から店へ出てゐた女給と、今方来たものとの交代時間で、坐る場所もない程混雑してゐる最中。鏡一臺の前にはいづれも女が二三人づゝ繡め眼じ兒ろ押しに顔を突出して、白粉の上塗をしたり髪の形を直したり、或は立つて着物を着かへたり、大胡坐で足袋をはき替へたりしてゐるのである。」

『つゆのあとさき』 P18)



開店当時の銀座本店外観 写真4-3-3 松屋呉服店 (HP『松屋』)

というように都会的に書いている。

一方で、神楽坂のありふれた日常の風景を

「石を敷いた路地は、二人並んでは歩けない程せまいのを、矢田は今だに一人先に立つて行つたら君江に逃げられはせぬかと心配するらしく、ハメ板に肱や肩先がるのもかまはず、身を斜にしながら並んで行くと、突當りに稲荷らしい小さな社があつて、低い石垣の前で路地は十文字にわかれ、その一筋はすぐさま石段になつて降り行くあたりから、其時静な下駄の音と共に棲を取つた藝者の姿が現れた。二人はいよいよ身を斜にして道を譲りながら、ふと見れば、乱れた島田のたばに怪し気な癖のついたのもかまはず、歩くのさへ退儀らしい女の様子。矢田は勿論の事、君江の目にも寝静まつた路地裏の情景が一段艶しく、いかにも深け渡つた色町の夜らしく思ひなされて来たと見え、言合したやうに立止つてその後姿を見送つた。」

上のように下駄の音まで細かく書いている。

都会の東京とかつての東京の姿をどちらもあわせて書いている。銀座や浅草に通い続け、小石川や麴町に住んでいた荷風らしい描き方である。どちらも否定的ではなく、肯定的でもなく、ありのままの東京の姿を書いたように思える。

しかし、登場人物のひとり、法学博士である老人・松崎の言葉には

「麴町の屋敷から抱車で通勤したその当時、毎日目にした銀座通と、震災後も日に日に変わって行く今日の光景とを比較すると、唯夢のようだというより外はない。夢のようだというのは、今日の羅馬人が羅馬の古都を思うような深刻な心持をいうのではない。寄席の見物人が手品の技術を見るのと同じような軽い賞賛の意を寓するに過ぎない。西洋文明を模倣した都市の光景もここに至れば驚異の極、何となく一種の悲哀を催さしめる。この悲哀は街区のさまよりもむしろここに生活する女給の境遇について、更に一層痛切に感じられる。」

『つゆのあとさき』 P102)

という、荷風の東京に対して否定的な風景描写ではなく、否定的な精神が表れているように思える。

3節 二作品の比較

明治時代の東京を舞台とした『すみだ川』、昭和の東京を舞台とした『つゆのあとさき』、この二作品を比較してみる。

まずわかるのは建物のスケールが大きくなっているということだ。『すみだ川』に出てくる建物は、民家や商店などとても規模の小さいものであるのに対し、『つゆのあとさき』には松屋呉服店や朝日新聞社社屋など、大きな建物が多く登場している。

ただし『すみだ川』の時代には既に浅草十二階（凌雲閣）（写真 4-3-1・4-3-2）が建っていた。浅草のへ行っているシーンもあることから、その場から見えたはずだが、あえて書かれていない。荷風は昔ながらの東京を表現するため、あえて描かなかったのではないだろうか。

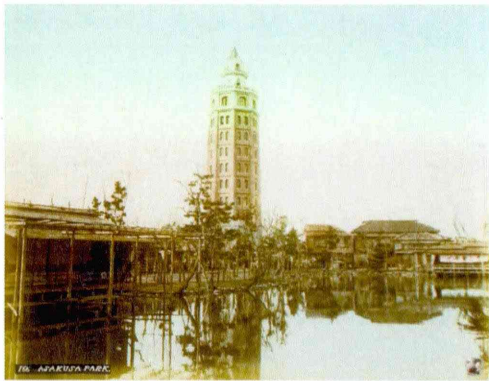


写真 4-3-1・4-3-2 明治 20 年代と 40 年代の凌雲閣 (HP『MEIJI TAISHO 1868-1926』)

また、交通手段にも大きな違いが見られる。『すみだ川』は徒歩がほとんどで、他に船での交通があるが、『つゆのあとさき』には船の描写はなく、ほとんど自動車や円タクといった交通手段に変わっている。交通手段の変化は、文明の変化が要因だが、その時期に電車の動いている時間が午前 1 時まででのびたこと、円タクが夜間割引の制度を導入し、より身近になったこともあげられる。

交通手段に関連して、『すみだ川』はタイトルの通り、水辺が舞台のシーンが多いが、『つゆのあとさき』にはほとんど見られない。日本橋や浅草のシーンが多いため、登場人物に見えていた可能性も、そしてそのそばを通った可能性も非常に高いと思われるため、あえて描かなかったのかもしれない。それは、人々が明治時代と比べると水から離れてしまったことを悲しみ、わざと描かなかったのだと思う。

そして、『つゆのあとさき』は『すみだ川』と比べると明らかに夜の東京を中心に描いている。それは東京中が電灯で明るくなり、昭和にはいとカフェやクラブは全盛期となり、そして荷風自身も夜の東京に通う機会が増えたことに関係しているのではないだろうか。東京は時代の変化と共に、夜も眠らぬ街へと変わっていったのだ。

こうしてみると、荷風はあえて描かなかったものも多いと考えられる。それはその時代を表現する上で、彼がスケールや交通など、何に重点を置いてきたかによるものだ。

しかし、『つゆのあとさき』には3節でも書いた通り、人々の生活感も描かれている。それは『すみだ川』とは変わらぬ雰囲気のある風景であり、昭和に入り、古い東京が完全になくなってしまったわけではないという荷風の見方が含まれているように思う。

一步路地を入れれば昔ながらの空気が漂う、それは東京中を歩き回り、東京を愛し、東京らしい東京を考え、描き続けた荷風だからこそその表現なのではないだろうか。

5章 分離派建築会とパンの会

1節 分離派建築会



写真 5-1-1 1920（大正9）年の分離派記念写真（HP『分離派建築博物館』）

上段左から 森田慶一、堀口捨己、瀧澤真弓

下段左から 矢田茂、山田守、石本喜久治

分離派建築会とは1920（大正9）年に東京帝国大学建築学科の3年課程を修了した16人中6人（写真5-1-1）をメンバーとする近代日本の先駆的な建築運動である。

結成時のメンバーは石本喜久治、堀口捨己、山田守、森田慶一、瀧澤真弓、矢田茂であった。第2回展以降、蔵田周忠、大内秀一郎、山田文象が参加している。

彼らは卒業前に東大構内で習作展を開き、卒業直後に白木屋百貨店で作品展を開いている。作品展に併せ、宣言文、ドローイング、会員の論考を収めた『分離派建築会の宣言と作品』にある宣言文は

「我々は起つ。

過去建築圏より分離し、総ての建築をして真に意義あらしめる新建築圏を創造せんがために。

我々は起つ。

過去建築圏内に眠って居る総てのものを目覚さんために溺れつつある総てのものを救はんがために。

我々は起つ。

我々の此理想の実現のためには我々の総てのものを悦びの中に献げ、倒るゝまで、死にまでを期して。

我々一同、右を世界に向って宣言する。」

（『分離派建築会の成立』 P2）

というものである。

東大で彼らに建築を教えたのは、佐野利器、内田祥三、野田俊彦などの構造派であり、彼らが望んだのは、その構造派からの分離であった。

そして、その頃の日本の建築において主流だった西洋式建築からの分離であった。

「建築はひとつの芸術である このことを認めてください」

（『分離派建築会の成立』 P3）

と石本喜久治は言い、堀口捨己は

「建築は芸術でなければならないと思います」

（『分離派建築会の成立』 P3）

と言っている。

パンの会は彼らにどのような影響を与えたのだろうか。

2節 主なメンバー

(1) 石本喜久治



石本喜久治 (HP『竹中工務店』)

- 1894 (明治 27) 神戸に生まれる
- 1920 (大正 9) 東京帝国大学を卒業 分離派建築会を結成
竹中工務店入社
- 1922 (大正 11) ドイツへ渡る
- 1927 (昭和 2) 退社 片岡石本建築事務所開設
- 1931 (昭和 6) 石本建築事務所開設
- 1963 (昭和 38) 逝去

神戸に生まれた石本は子沢山な家庭であったため、幼い頃に養子に出されている。その家庭でつらい手伝いをしながら、しかし勉強には手を抜かず、奨学金をとれるほど成績優秀であったという。

大阪市の尋常小学校、中学校を経て、東京高等工業学校(現在の東京工業大学)電気科、旅順工科大学予科の機械科へ進学するも中退する。

その後、東京帝国大学建築学科へ入り、卒業する時に当時構造学派の強かった大学教育を批判する「帝大建築学科の規制を論じてそれが根本改革に及ぶ」と題する一文を雑誌『建築世界』に発表し、竹中工務店に入社。

入社2年目にはドイツへ留学しバウハウスなどに大きな影響を受けた。

竹中工務店で山口銀行東京支店、大阪市立桃園小学校、東京朝日新聞社などを手がけ、白木屋百貨店日本橋本店の設計を機に独立。

(2) 堀口捨己



堀口捨己（『現代の建築家 堀口捨己』扉）

- 1895（明治 28） 岐阜県に生まれる
- 1917（大正 6） 岡山第六高等学校卒業 東京帝国大学建築学科へ入学
- 1920（大正 9） 東京帝国大学建築学科卒業 同大学院へ進学 分離派建築会結成
- 1923（大正 12） ヨーロッパへ留学
- 1932（昭和 7） 東京美術学校教授
- 1949（昭和 24） 明治大学教授
- 1965（昭和 40） 神奈川大学教授
- 1966（昭和 41） 宮中歌会始めの召人を務める
- 1984（昭和 59） 死去

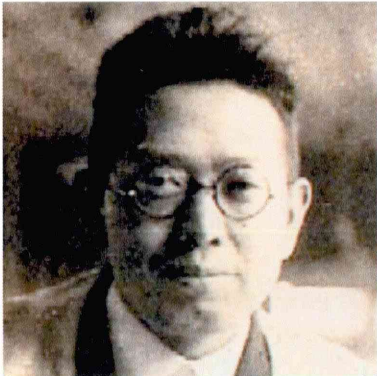
堀口捨己は農業を営む父親の元に育っている。父親は中国の書物に親しみ、絵も描く知識人であったという。父親は彼を将来軍人か医者にしたかったようであるが、父の意図に反して建築の道を進む。それは小さいころから絵を描くのが好きだったかららしい。彼の才能は歌にも表れており、後に『堀口捨己歌集』を出版するほどであった。

東大に入ってから、構造への志向の強かった先輩・野田俊彦としばしば論争を繰り広げていたと堀口は語っている。

卒業後、分離派として活躍する彼は他の同級生とは異なり、大学院で西洋建築史を研究する。当時、同時に最高学府を卒業した、たった 15 名は皆、将来を約束された身であったが、あえて彼はその道には進まなかったのだ。ヨーロッパ留学から帰ると、清水組（現在の清水建設）へ入社するが肌に合わず、すぐに辞めフリーで設計をしている。エリートであることは彼には合わなかったのかもしれない。

日本の和風建築の研究も行い、その様式を現代に取り入れた設計をしていることは、パンの会の西洋と日本の入り混じった感覚と似ている部分もあるのかもしれない。

(3) 山田守



山田守 (HP『INAX REPORT』)

- 1894 (明治 27) 岐阜県に生まれる
- 1917 (大正 6) 東京帝国大学建築学科へ入学
- 1920 (大正 9) 東京帝国大学建築学科卒業 分離派建築会結成
逓信省営繕課へ技手として就職
- 1924 (大正 13) 復興局土木事務嘱託
- 1929 (昭和 4) 欧州視察
- 1930 (昭和 5) 米国視察
- 1949 (昭和 24) 山田守建築事務所を湯島に開設
- 1951 (昭和 26) 東海大学建設工学科教授に就任
- 1966 (昭和 41) 死去

山田守は岐阜の豪農で地主の五男として生まれた。若いころからニーチェを愛読していたが、行動的な性格で、高校時代は洋画会を作ったり、ローラースケートを持ち込み流行らせたりしていたらしい。絵以外にも、俳句と酒もこよなく愛した人物だ。

分離派建築会を結成しながら、逓信省に入った山田は吉田鉄郎や岩元禄などの先輩と同様、逓信建築家としてキャリアを積む。そんな中、海外視察によって欧米のモダン建築に感化された山田の作風は表現主義から機能主義へと変化していく。

そして聖橋や日本武道館、京都タワーなどを設計した。

「山田には酒にからむ武勇伝がかなりあり、心情がストレートに表出される、直情的な性格だったということがうかがえる。それとともに、精神の純粹さや倫理観をあわせ持っていたことも忘れてはならない。(中略)山田の部下には彼を慕うものが多かったといわれている。(中略)純粹で、信義を重んじるという、また身分によって人を差別しないという彼の人が、そのチームの結束力を高めるのに寄与していた」(『建築家山田守作品集』P16 藤岡洋保)という。

(4) 森田慶一



森田慶一（HP『分離派建築博物館』）

- 1895（明治 28） 三重県に生まれる
- 1920（大正 9） 東京帝国大学建築学科卒業 分離派建築会結成 警視庁技師
- 1922（大正 11） 京都帝国大学助教授
- 1934（昭和 9） 京都帝国大学教授 ヨーロッパへ渡る
- 1950（昭和 25） 京都府建築審査会委員
- 1951（昭和 26） 奈良県建築審査会委員
- 1953（昭和 28） 京都国立博物館調査員
- 1963（昭和 38） 東海大学工学部教授
- 1983（昭和 58） 死去

三重に生まれた森田慶一は、東大卒業後、警視庁へ入庁している。

その後、武田五一に招かれ京大で強弁をとり、同時に京都へ拠点を移した。初期の京大の建築学科の教育陣の中心メンバーでもある。

京都へ移った直後に造られた京都帝国大学農学部正門（現在の京都大学農学部正門）のアーチや柱の先が尖ったデザインから、分離派建築会らしさが表れている。

京都帝国大学楽友会館（現・京都大学楽友会館）も分離派建築会時代の森田の作品で、武田五一が設計したものを行い、森田が大きく改変して実現したことは有名な話である。

戦後、森田は古典建築の研究も行い、作風も古典風のものへと変化していく。

彼の『建築論』や『ウィトルウィウス 建築書』の翻訳者としても知られている。

(5) 瀧澤真弓



瀧澤真弓 (HP『分離派建築博物館』)

瀧澤真弓は1896(明治29)年に長野で生まれ、卒業後は葛西万司事務所を経てすぐに平和記念東京博の技術員(博覧会準備委員)(写真5-5-1・5-5-2)となる。そこで蔵田周忠に出会い、蔵田が分離派に参加するようになった。その後、堀越三郎建築事務所設計をした後、教員となる。

瀧澤は戦後に行っていた研究や、分離派時代初期の優れた計画案を残しているが、他のメンバー比とべて目立たぬ存在だったようだ。彼の全容もあまり明らかにされてはいない。どうも建築作品が少なく分離派以後は研究者として地道な活動に身を投じたからのようだ。

瀧澤真弓の戦後の業績のひとつに明治時代の建築物の調査があり、また日本建築協会の近代建築調査委員会の委員長として日本の近代建築の評価を行ったとされる。実は分離派の瀧澤が既に日本の近代建築史研究のパイオニアのひとりだったのではないだろうか。(以上HP『分離派建築博物館』より略)

1983(昭和58)年に死去。

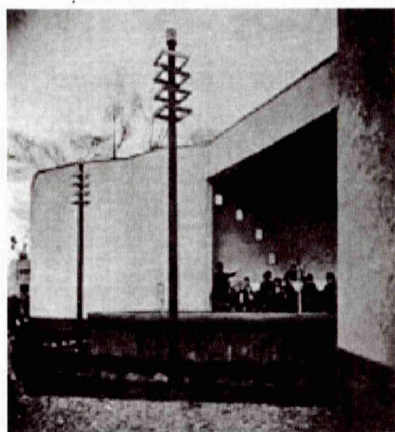


写真5-5-1・5-5-2 野外音楽堂 化学工業館 (HP『分離派建築博物館』)

(6) 矢田茂



瀧澤真弓 (HP『分離派建築博物館』)

1896 (明治 29) 年生まれ。清水建設に就職する。1958 (昭和 33) 年死去。

(7) 蔵田周忠

蔵田周忠は 1895 (明治 28) 年、山口県で生まれた。

1913 (大正 2) 年、工手学校建築科 (現在の工学院大学) を卒業後、三橋四郎建築事務所、曾根・中条建築事務所、早稲田大学工学部建築選科に進んだ後、平和記念東京博のパビリオン設計のための技術員となり、そこで堀口捨巳や瀧澤真弓らに出会い、分離派に参加するようになる。

ドイツに渡り、バウハウスやグロピウスなどのデザイン思想を学び、帰国後、モダンデザインの影響を受けた設計をする。

自作の木造作品等を発表しながら、建築ジャーナリズム分野で執筆を行ない、近代的家具・工芸の分野でも研究を行なった。

戦前は東京高等工芸学校 (現在の千葉工業大学) で教壇に立ち、戦後は武蔵高等工学校 (現在の武蔵工業大学) の教授に就任している。1966 (昭和 41) 年、死去。

(8) 山口文象



山口文象（『建築家山口文象 人と作品』扉）

- 1902（明治 35） 浅草に生まれる（瀧蔵と名づけられるが後に文三と改名）
- 1910（明治 43） 養子となる
- 1915（大正 4） 府立一中（現在の日比谷高校）に合格するも入学を断念
東京工業高等学校（現在の東京工業大学）附属職工徒弟学校木工科大工分科に入学
- 1918（大正 7） 清水組（現在の清水建設）へ
- 1920（大正 9） 通信省経理局営繕課へ就職
- 1921（大正 10） 分離派に参加
- 1923（大正 12） 創宇社建築会を結成
- 1924（大正 13） 復興局土木部の嘱託技師となる
- 1927（昭和 2） 片山・石本建築事務所の主任技師となる
- 1930（昭和 5） 渡欧
- 1932（昭和 7） 帰国 事務所を設立
- 1950（昭和 25） 新制作協会に建築部が新設され同時に会員となる
- 1952（昭和 27） RIA 設立（正式な設立は翌年）
- 1962（昭和 37） 女子美術短期大学服飾科の非常勤講師となる
- 1965（昭和 40） 東京工業大学建築学科の非常勤講師となる
- 1978（昭和 53） 死去

山口は東京の下町・浅草に清水組の大工棟梁であった父親の息子として生まれる。その後養子に入った岡村家の父親もやはり建築に関わるとび職であったことから、建築が常に身近にあったことがうかがえる。

府立一中に合格するも、経済的な理由から彼を大工にしたかった父親の反対に合い、東京工業高等学校で大工としての基本技術を学んでいる。彼の作品に土木的なものが多いのはこの経験が影響しているのかもしれない。

卒業後、父親の関係で清水組の定夫（一年後、雇用が不安定な定夫から常雇である雇員に昇格している）となった。そこで現場をこなすうちに、建築家、画家、作家に憧れ始める。清水組を辞め、就職活動中に面識すらない中條精一郎に就職を頼みこみ、逓信省へ入る。逓信省で岩元禄を慕っていた山口は、岩本が結核にかかり療養中、必死に看病していたという。そこには堀口捨己などの分離派メンバーなども出入りし、建築論や美術論を多く闘わせていた。それが分離派に加わるきっかけとなった。



写真 5-2-8-1 第八回創宇社建築会のメンバー（『建築家山口文象 人と作品』）

しかし、エリート集団の分離派で、いくら努力をしてもなかなか対等に扱ってもらえないと感じていた彼は、逓信省営繕課の現場監督や製図仲間である小川光三、梅田穰、専徒栄記、広木亀吉と共に、創宇社建築会（写真 5-2-8-1・5-2-8-2・5-2-8-3・5-2-8-4・5-2-8-5）（名称の由来は、新しき建築を創造し、宇宙を満たすというもの）を結成する。そこが他の分離派のメンバーとは異なる考え方をしていたことがうかがえる点である。

白木屋百貨店や銀座十字屋楽器店、朝日新聞社社屋で行われた展示会には有島生馬（画家）や坂崎担（美術評論家）も訪れ、MAVO との関係も始まり、各界に影響を与えたようだ。

渡欧し、グロピウスのアトリエで働き、ヨーロッパに深く感化された彼は、帰国後、設計を行う傍ら、教育活動も熱心に行い、自宅に生徒を招いて講義をするほどであったという。それは自らがエリート教育を受けていなかったために知識量や技量に及ばなかった経験から、未来のある若者に様々なことを伝えなければならないと感じていたからなのかもしれない。

ちなみに、小学生のころに自分で考えた「蚊象」という名前は、動物で一番小さい「蚊」

と一番大きい「象」を組み合わせたもので、大正ロマンチズムの風潮を受けていたからだと山口は語っている。

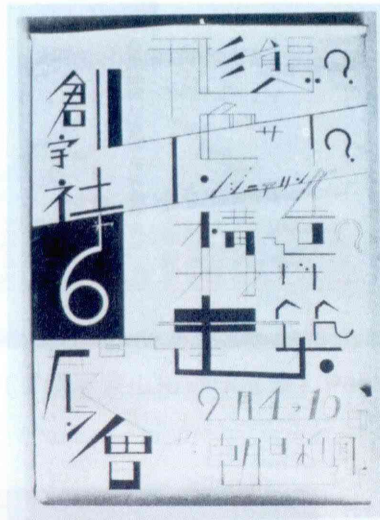
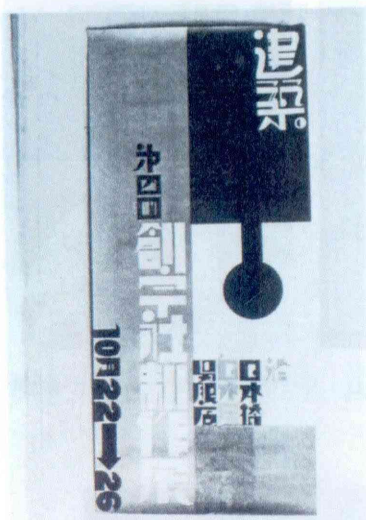
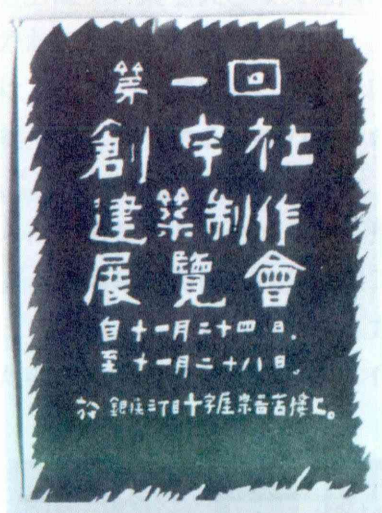


写真 5-2-8-2・5-2-8-3・5-2-8-4・5-2-8-5 分離派展覧会ポスター (『建築家山口文象 人と作品』P52)

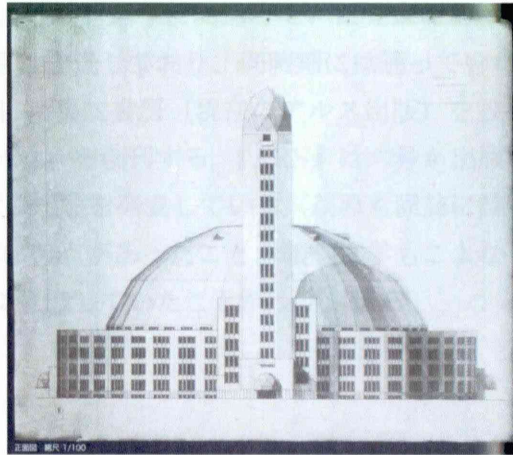
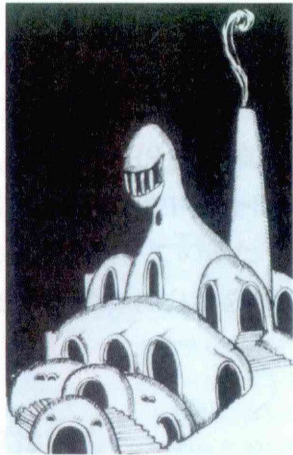
3節 パンの会からの影響やつながり、共通点

(1) 耽美的

パンの会と分離派の最も大きな共通点はより芸術らしさを、美しいものを、という耽美的な考え方である。

パンの会は、現実や人間をあるがままに描こうとする自然主義に反発し、分離派は構造派という現実主義に反発する。その当時の時代背景なくして現れなかった団体だと言っていいだろう。

そして彼らはその答えをヨーロッパに見出した。パリに対して憧れを抱いたパンの会、ドイツのモダニズム建築に憧れた分離派、それはヨーロッパの都市と比べるとどうしても劣ってしまう古い東京、そして古い考え方や体制の抜けない自分たちの生きるに対する反発でもあったのだろう。彼らは皆、ダダイストであったのだ。



絵 5-3-1-1・写真 5-3-1-2 山田守 (『建築家山田守作品集』P4)

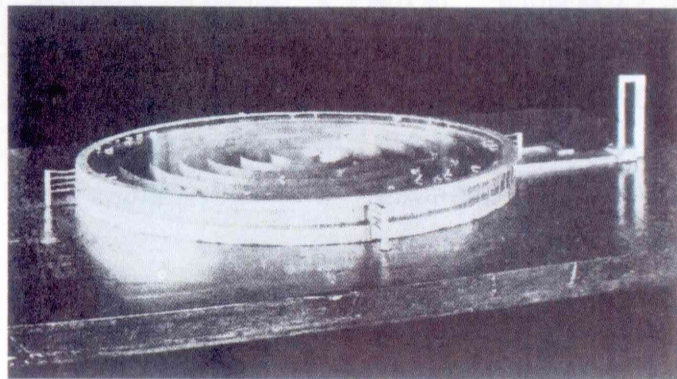


写真 5-3-1-3 山口文象 (『建築家山口文象 人と作品』P52)

(2) 北原白秋と堀口捨己

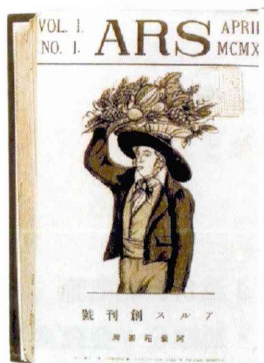


写真 5-3-2-1 『ARS』大正4年創刊号 (HP『早稲田と文学』)

堀口は岐阜出身だが、岡山の第六高等学校時代、白秋の主宰する短歌団体・巡礼詩社の普通社友となっている。そこまでに至る経緯は定かではないが、白秋と家を行き来するくらい親しかった萩原朔太郎が同じ岡山第六高等学校に通っていた先輩であったことが関係しているのかもしれない(ただし萩原は中退しており、同時期には通っていない)。

1915(大正4)年、白秋は弟と共に阿蘭陀書房(現在のアルス出版)を設立する。そしてそこから、雑誌『ARS』(写真5-3-2-1)を創刊する。『ARS』は六号が出版され、廃刊となるが、堀口捨己はその中に計31首の短歌を発表している(萩原も同誌に詩を掲載している)。このことから、このふたりには接点があったこと、絵や文学もこよなく愛し、その才能にも恵まれた堀口は白秋を非常に意識していたことがうかがえる。

(3) 太平洋画会

1902(明治35)年に発足した、太平洋画会に、当時の洋画会の新人であった満谷国四郎、吉田博、中川八郎、石川寅治、石井柏亭、大下籐次郎、丸山晚霞などが参加していた。

太平洋画会には堀口捨己、山田守、石本喜久治も参加している。彼らが絵や文学も好きだったことは前にも述べてある通りであるから、太平洋画会でも熱心に活動していたのだろう。そして、注目すべきは石井柏亭が太平洋画会の中心人物であったことである。ここにもパンの会のメンバーと分離派メンバーとの接点があるのではないだろうか。

(4) 白樺派

「あのころ芸術運動の『白樺』という雑誌が出たんです。これはわたくしども非常に感心しまして、わたくしども内容読まずに絵を切り抜いてたんです。堀口君は白樺運動全体を捉えてて、ああいう白樺運動のようなことを建築でやりたいといったことがあるんです」

(『分離派建築会の成立』 P8)

と、瀧澤真弓は話している。これは瀧澤真弓、堀口捨己、森田慶一、山口文象の出席した「座談会 分離派・東京中央電信局・山田守」の中で語られたもので、分離派が白樺派を意識していたことが読み取れる。

白樺派は武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎、里見弴、柳宗悦、郡虎彦、有島生馬、高村光太郎、北原白秋などが参加した、明るい理想主義的な団体で、パンの会とメンバーや反自然主義という面でつながりがある。

また、分離派のメンバーは短歌や俳句を残している者（山田守や堀口捨己など）（写真 5-3-3-1・5-3-3-2・5-3-3-3・5-3-3-4）も多く、堀口捨己は歌集も出している。そのくらい、文学の世界をもともと意識していたのではないだろうか。

実際に有島生馬は朝日新聞社で行われた第八回の分離派の展覧会を見に来ている。芥川龍之介も展覧会へ足を運んでいる（写真 5-3-3-5）。彼らに何らかの関係があったことは否定できない。そして建築界の運動もほかの世界に多少なりとも影響を与えていたのかもしれない。

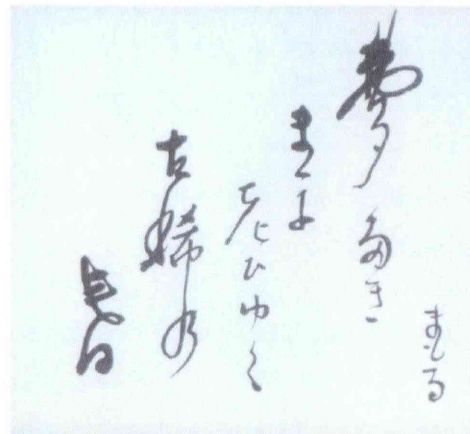
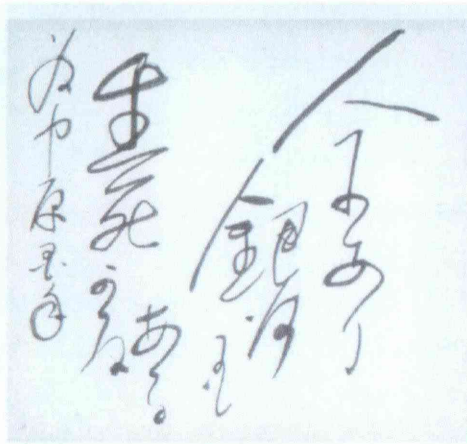


写真 5-3-3-1・5-3-3-2 山田守の残した俳句（『建築家山田守作品集』 P33）

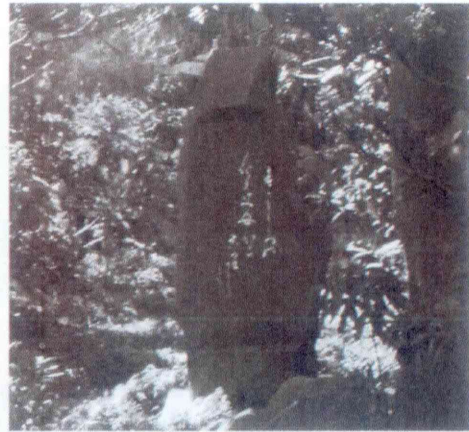
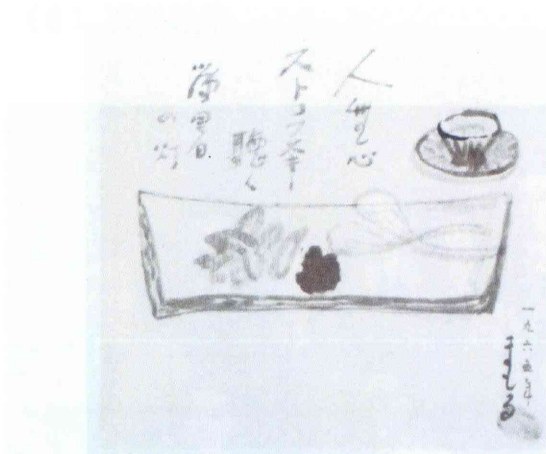


写真 5-3-3-3・5-3-3-4 山田守の残した俳句と句碑（『建築家山田守作品集』P33）

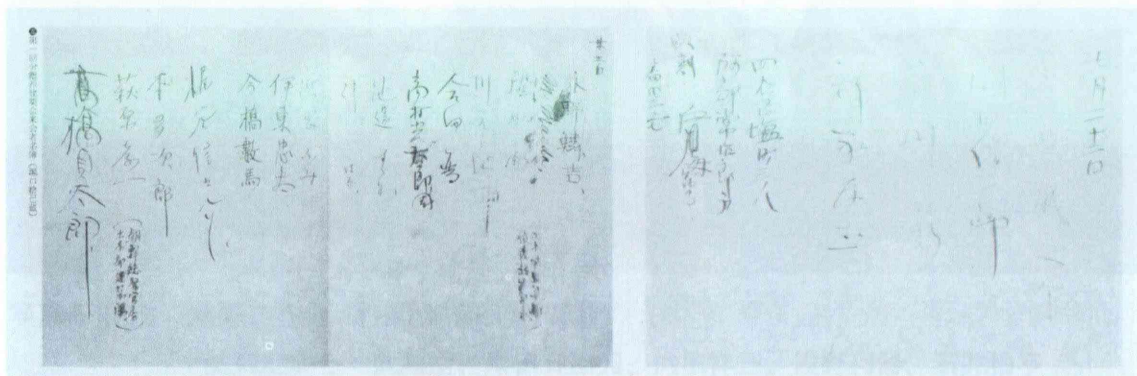


写真 5-3-3-5 展覧会の芳名（『現代の建築家 堀口捨己』P10）

(5) 石井柏亭



写真 5-3-5-1 建築二八会 (『INAX REPORT』)

前列左から 武藤清、岸田日出刀、内田祥三、佐野利器、石井柏亭
後列には市浦健、前川國男、太田和夫、横山不学、吉村辰夫、谷口吉郎

石井柏亭は 1922 (大正 11) 年から東京帝国大学建築学科の講師をしている。分離派のメンバーが卒業してしまってからではあるが、彼は建築の世界と大きな関わりがあったことがうかがえる。

ここにある建築二八会 (写真 5-3-5-1) というのは 1928 (昭和 3) 年の東大建築学科を卒業した 28 名の同窓会のこと、彼らはしばしば当時自分たちの教員であった内田祥三、佐野利器、石井柏亭を呼んで同窓会を催していたらしい。そこには山口文象の親友であった前川國男の姿が見られ、彼らのつながりも見えてくる。

そしてもうひとつ、重要なのは、石井柏亭と内田祥三、佐野利器のつながりである。同時期に教鞭に立っていた彼らには同窓会でももちろん、教員時代にも会話を交わしていたはずである。耽美派であった柏亭と構造派であった内田と佐野との会話は相反するものであっただろう。

しかし、分離派と構造派との関係、柏亭と構造派との関係はお互いを忌み嫌っていたものではない。自分たちの信じるものが他のものより大きかっただけの話である。ある時は学校で、ある時カフェーでお互い熱く議論し合うよい関係であったはずである。そうでな

ければ、自分たちの確立された考え方が生まれなかった可能性もあるのだから。

そう考えると、分離派の恩師である内田と佐野のつながりは、柏亭、そしてパンの会につながりがあるのではないだろうか。

結論

明治時代、ひとつの文芸団体の作り出した波は、東京の様々な表情を豊かに描いた。それは、色彩表現であったり、流行のものであったり……色々な方法を使って描いている。

そこに作家たちは、西洋と江戸が溶け合ってきた東京に対する自分たちの憧れや悲哀など、気持ちの葛藤を込めた。自分自身の育ってきた環境や、交友関係などもその考えや作風には大きく影響している。そうして描かれた東京は美しく、色鮮やかで、みずみずしい。

作家やその周りにいた芸術家たちは、江戸を懐かしむ一方で東京の未来に夢を見ていた。彼らの見た夢は物語となって今の私たちに伝えられる。

そんな彼らの見た夢は東京を作る建築の分野にも大きな夢を与えた。建築の世界に生きる彼らは東京を発展的な都市に、技術の進んだ東京の都市を目指した。常に情熱を持って自分達が東京を変えてやろうとする想い、そして様々な討論はまるで文芸家たちと同じだ。その頃の東京は熱意あふれる若者たちでいっぱいだったのだろう。

彼らが文学の世界で東京を描くことは、他の世界にも変化をもたらすことであったのだ。言い方を代えれば、東京はそこまで広い分野を帰るだけの力を持った都市であったのである。

彼らの持つ夢は大きく広がったが、彼らの生きる世界、出会う人々、情報は今よりもずっと狭く、不便なものだった。だからこそ、熱くならなければ、夢を見る権利、実現する権利を与えてもらえなかったのかもしれない。

しかし、現在はどうか。

東京には情報があふれ、人のつながりは広く浅い。文芸の世界も建築の世界もかつての東京に比べれば、自分たち個人の世界だ。あんなに熱い文芸家の若者であふれていた東京は無関心な人々ばかりになってしまった。

今の東京にもそうした様々な関わりと、そこから生まれる情熱が必要なのではないだろうか。

引用文献・参考文献・HP

- 『パンの会』野田宇太郎 六興出版社 1949
『日本耽美派の誕生』野田宇太郎 河出書房 1951
『和歌文学大系 29 桐の花／酒ほがひ』
今西幹一・鷺只雄（北原白秋・吉井勇）著 明治書院 1998
『明治文学全集 74 明治反自然派文学集 1』北原白秋代表著作 筑摩書房 1977
『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』
北原白秋・高村光太郎・宮澤賢治著 筑摩書房 1981
『すみだ川』永井荷風 岩波書店 1955
『すみだ川・新橋夜話』永井荷風 岩波書店 1987
『腕くらべ』永井荷風 岩波書店 1967
『おかめ笹』永井荷風 岩波書店 1987
『つゆのあとさき』永井荷風 岩波書店 1987
『緑色の太陽』高村光太郎 岩波書店 1982
『痴人の愛』谷崎潤一郎 改造社出版 1934
『谷崎潤一郎 新潮日本文学 6』谷崎潤一郎 新潮社 1970
『刺青』谷崎潤一郎 初山書店 1968
『芸苑雑稿 巴里の美術学生』岩村透 平凡社 1971
『屋上庭園 第一号』長田秀雄ほか 屋上庭園発行所 1909
『屋上庭園 第一号』長田秀雄ほか 屋上庭園発行所 1910
『常用国語便覧』加藤道理ほか 浜島書店 1999
論文『分離派建築会の成立』天内大樹
『現代の建築家 堀口捨己』SD 編集部編 鹿島出版会 1983
『堀口捨己歌集』堀口捨己 鹿島出版会 1980
『建築家山田守作品集』大塚保 東海大学出版会 2006
『建築家山口文象 人と作品』近藤正一 相模書房 1982
『建築論』森田慶一 東海大学出版会 1979
『ビジュアル・ワイド 明治時代館』柳町敬直 小学館 2005
『明治大正東京散歩』人文社編集部 人文社 2003
『(49) 外に開かれる目、内に高まる苦悩』
<http://www.tt.em-net.ne.jp/~teda/history/kindai/setsu/49.htm>
『写真の中の明治・大正』
<http://www.ndl.go.jp/scenery/index.html>
『近代書誌データベース』

http://192.244.21.24:591/kindai_shoshi/search.html

『浮世絵のアダチ研究所』

<http://www.adachi-hanga.com/ukiyo-e/item/hiroshige102.htm>

『日本一の橋日本橋開通』

http://www.z-flag.jp/blog/archives/2008/04/post_606.html

草野心平 「高村光太郎・人と作品」 (『日本詩人全集 9 高村光太郎』 所収)

<http://www.kurikomanosato.jp/00x-52ks-kaisatu.htm>

『ビウサン会とパンの会 高村光太郎』

http://www.aozora.gr.jp/cards/001168/files/46380_25635.html

『早稲田と文学』

<http://merlot.wul.waseda.ac.jp/sobun/k/ki015/ki015a03.htm>

『古本倶楽部』

http://nakano.jimbou.net/catalog/geta_themes.php/gtID/74

『食後の唄』

<http://school.nijl.ac.jp/kindai/CKMR/CKMR-00023.html>

『中央区観光協会』

http://www.chuo-kanko.or.jp/knowledge/town/town_05.html

『万世橋』

http://www.geocities.co.jp/tokyo_ashy/bk-manseibashi.html

『喫茶店』

http://ajisaibiyori.cocolog-nifty.com/blog/2008/03/post_e37a.html

『第一国立銀行の誕生』

<http://www.tanken.com/daiiti.html>

『ライオン』

<http://www.ginzalion.jp/company/history.html>

『伊東市 木下杢太郎記念館』

<http://www.city.ito.shizuoka.jp/hp/page000002800/hpg000002733.htm>

『千夜千冊』

<http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya0938.html>

『日本音声保存』

<http://www.onsei.co.jp/goods-details/?itemcode=ANOC2044>

『帝銀事件ホームページ』

<http://www.gasho.net/teigin-case/information/news/20050929/20050929.htm>

『石井柏亭』

<http://www.geocities.jp/nack735/isiihakutei.html>

『山本鼎記念館』

<http://museum.umic.ueda.nagano.jp/kanae/index2.html>

『山田書店』

http://www.yamada-shoten.com/japanese/catalog/img/pdf/no78_p01-10.pdf

『熊谷市ホームページ』

<http://www.city.kumagaya.lg.jp/about/rekisi/tyomeinajinbutu/moritatunetomo/index.html>

『埼玉新聞』

<http://homepage2.nifty.com/SAKITAMASINBUN/sub000tunetomo.htm>

『美術学校時代』

http://www.aozora.gr.jp/cards/001168/files/46378_25636.html

『岩村透』

<http://www.city.sukumo.kochi.jp/sbc/history/jinnbutusi/008.html>

『永井荷風 つゆのあとさき について』

<https://gair.media.gunma-u.ac.jp/dspace/bitstream/10087/1420/1/GJOH017.pdf>

『Letter from Yochomachi(Google)』

yochomachi.blogspot.com/2008/06/blog-post.html

『毎日 jp 昭和毎日』

showa.mainichi.jp/news/1959/04/79-836c.html

『今戸橋』

<http://www.aurora.dti.ne.jp/~ssaton/taitou-imamukasi/imadobasi.html>

『分離派建築博物館』

<http://www.sainet.or.jp/~junkk/>

『松屋』

<http://www.matsuya.com/>

『浅草十二階 凌雲閣』

<http://www.tanken.com/ryoun.html>

『MEIJI TAISHO 1868-1926』

<http://showcase.meijitaisho.net/>

『分離派建築博物館』

<http://www.sainet.or.jp/~junkk/>

『竹中工務店』

<http://www.takenaka.co.jp/architects/architects9.html>

『INAX REPORT』

<http://inaxreport.info/index.htm>

『山口文象の半生』

<http://www.ria.co.jp/bunzoken/syogai.htm>

謝辞

この論文を書くにあたり、先生方や先輩、後輩たちにお世話になったこと、本当に感謝しています。

陣内先生には、お忙しい中、時間をいただき、自分の知らない東京や作家の事、文献など、とてもたくさんの知識を頂きました。

渡辺先生には、キーワードとなる建築の世界の話を現在の建築界と比較してとてもわかりやすく説いて頂き、最後の章をまとめることができました。

4年生の宗岡君には論文を見せてもらったり、データをもらったり、そして東京についてのたくさんのヒントをもらいました。

英語の概要を作るにあたり、英語が苦手な私に代わって、英訳の添削をしてくれた冨手さん、忙しい中、本当にありがとうございました。

同学年の先輩方は、私が大学院に進学してから2年間、同じように論文を提出するという忙しい中、相談にのってもらったり、時には励ましあったりと、私にとってなくてはならない存在だったと思います。特に田口さんと二宮さん、妹尾さんには本当にお世話になりました。

そして、高村先生には4年生のときから3年間、論文のことでは本当にご迷惑をおかけしました。なかなか言うことを聞かない私の指導は高村先生も本当に大変だったと思います。それでも、数え切れないくらいの指導やアドバイスを頂いたことがなければ、この論文は書けませんでした。本当にありがとうございました。

面白い論文になったかどうかはわかりませんが、本当に協力いただいた全ての人へ、ここに感謝を表したいと思います。